

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第87号

池上遺跡の発掘調査	-----	中川 和哉	-- 1
大淵遺跡第4次の発掘調査	-----	戸原 和人	-- 5
八幡市女谷・荒坂横穴群における改葬の実例	-----	岩松 保・上田真一郎	-- 9
平成14年度発掘調査略報	-----		21
15. 木橋北城跡			
16. 福知山城跡			
17. 観音寺遺跡			
18. 太田遺跡第15次			
19. 長岡京跡右京第750次・神足遺跡			
20. 下植野南遺跡(門田・五条本地点)			
21. 木津川河床遺跡第15次			
22. 赤ヶ平遺跡第3次			
府内遺跡紹介	94. 大住車塚古墳・大住南塚古墳	-----	35
長岡京跡調査だより	・84	-----	37
センターの動向	-----		39
受贈図書一覧	-----		41

2003年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# いけがみ 池上遺跡の発掘調査

中川 和哉

## 1. はじめに

池上遺跡は京都府船井郡八木町池上に所在する旧石器時代から近世までの複合遺跡である。

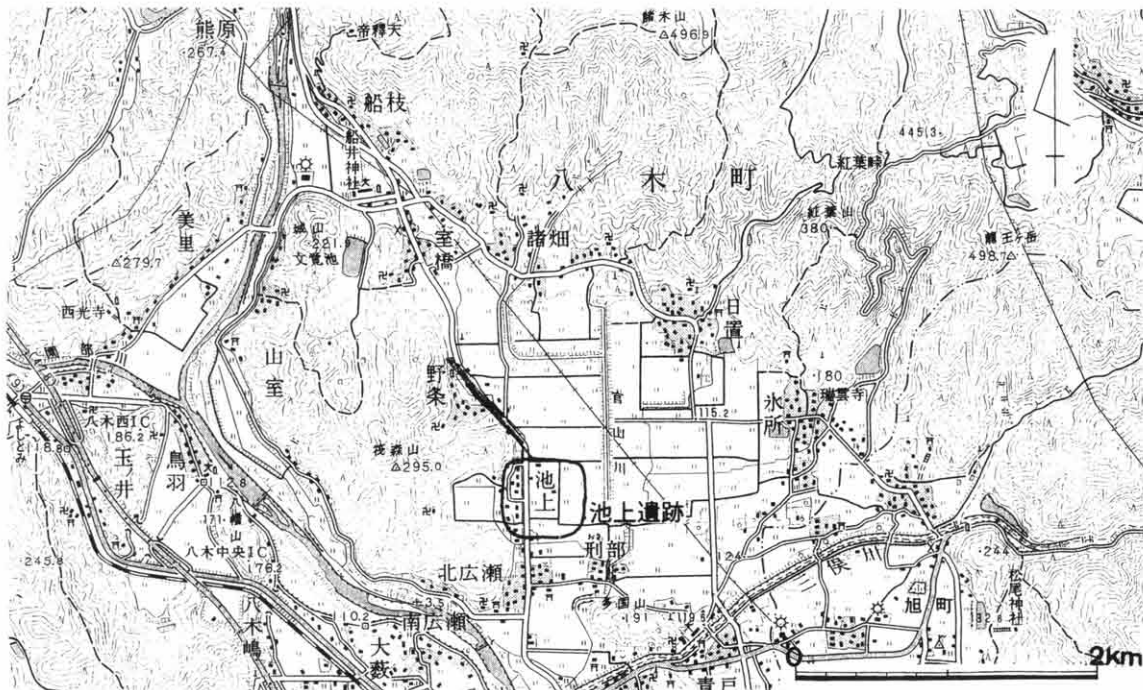
これまで、八木町教育委員会、京都府教育委員会、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターによって計15回の発掘調査(付表、第2図)が行われている。池上遺跡は亀岡盆地の北端に位置し、その中でもさらに山に囲まれた小盆地状を呈する地域に立地している。

## 2. 調査概要

発見された遺構は、各時期のものが重なり合って複雑な様相を見せる。以下に主要な遺構や遺物について時代ごとに紹介して行きたい。

①平安時代 第4・13次調査で12世紀の総柱の掘立柱建物跡、墓壙が検出されている。第5次調査では10世紀と考えられる井戸が検出され、内部からこの地域の基準資料となる土器群が出土している。池上の地名の元になった天台寺院池上院は、皇慶(977~1049)が開いた寺で、12世紀後半に画かれたとされる吉富荘絵図で池上寺在家として出ている住宅と考えられる。

第13・15次調査では、条里地割と関連する南北・東西の溝が検出されている。当地の条里地割を考える基準資料となると考えられる。



第1図 調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西北部)

付表 調査次数一覧

次数	調査主体	調査年度	調査担当者
1	八木町教育委員会	平成7年	谷口梯
2	八木町教育委員会	平成9年	谷口梯
3	八木町教育委員会	平成10年	谷口梯
4	八木町教育委員会	平成10年	谷口梯
5	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成10年	中川和哉・高野陽子・筒井崇史
6	京都府教育委員会	平成11年	奈良康正
7	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成12年	村田和弘
8	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成12年	田代弘・岡崎研一・野島永
9	八木町教育委員会	平成13年	谷口梯
10	京都府教育委員会	平成13年	岸岡貴英
11	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成13年	田代弘
12	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成13年	岡崎研一・中川和哉
13	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成14年	小池寛・中川和哉・中村修平
14	京都府教育委員会	平成14年	岸岡貴英
15	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成14年	中川和哉・中村修平

②奈良時代 第12次調査では、東西9間以上、南北2件の建物を検出している。第13次調査では掘立柱建物跡2棟と井戸が検出されている。掘立柱建物跡の1つは南北5間、東西2間以上の規模を持ち、これと近接して3.3m四方の方形の掘形を持つ井戸を検出した。

第12・13次調査では円面硯、平瓦片、須恵器、土師器が出土している。

③古墳時代 竪穴式住居跡130基以上、掘立柱建物跡棟、土坑多数などが検出されている。竪穴式住居跡は四角い平面形をしたもので、古墳時代中～後期のものである。

第4・5次調査では独立棟持ち柱建物跡がそれぞれ1棟ずつ検出されている。第12・13次調査では布留式土器が出土する住居跡から韓式土器が出土している。住居跡の内部からは鉄製の小札・槍鉋・鋤先・鉸具、鉄滓が出土している。住居跡床面から白玉が多く出土する竪穴式住居跡も見られる。第12次調査区の土坑中から、須恵質の陶棺片が出土している。

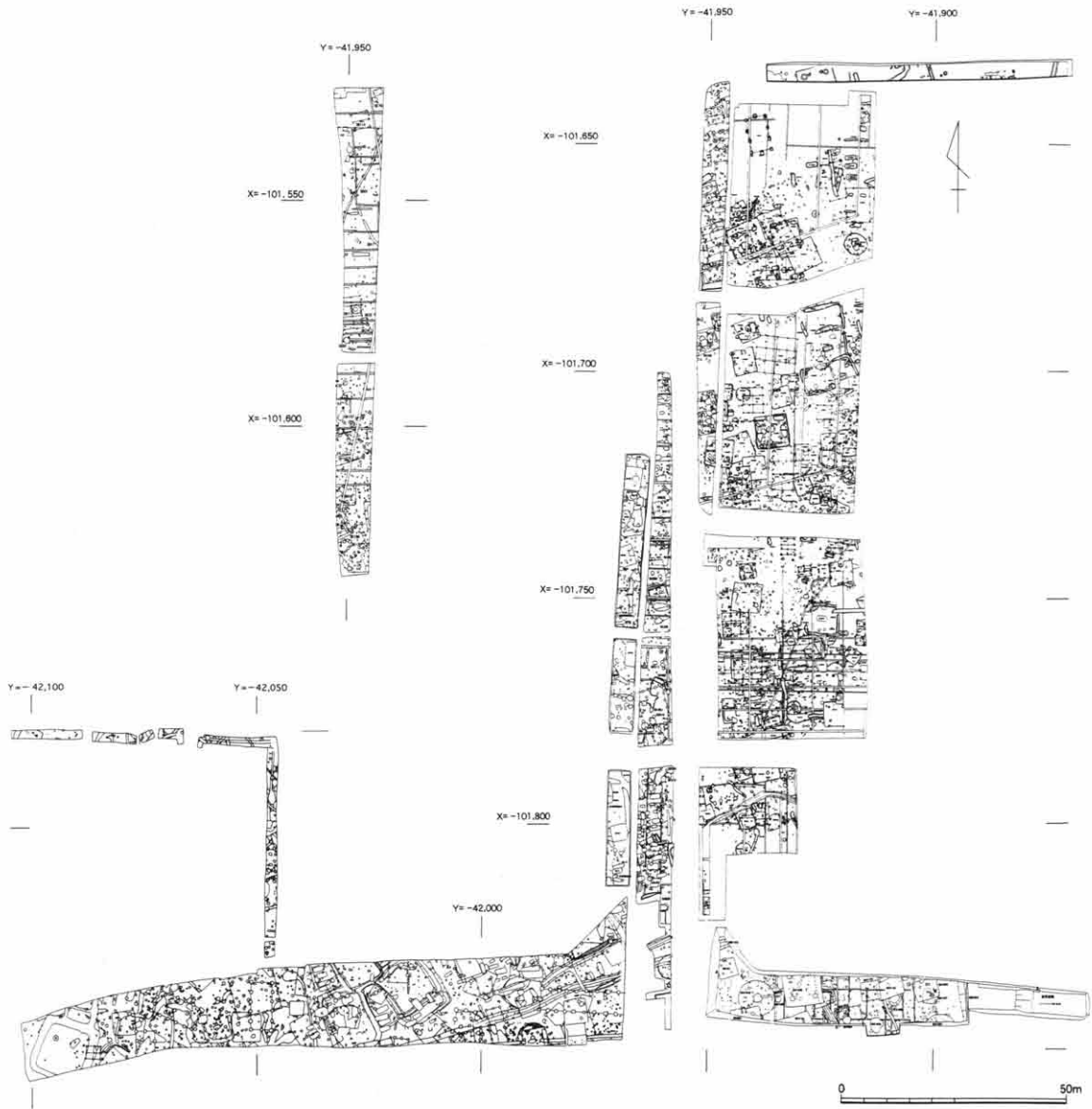
④弥生時代 方形周溝墓、竪穴式住居跡、溝が検出されている。第5・8・12・13次調査地を貫いて集落の内と外を区画する中期後半の溝が検出されている。方形周溝墓は50基以上、主体部は120基以上検出されている。第4次調査地では磨製石剣が出土した墓壙、第13次調査では磨製石鏃が出土した墓壙がそれぞれ1か所認められた。弥生時代遺構の分析から居住地として利用されたのち、最終的にこの調査地点が墓地として利用されるようになったことがわかった。方形周溝墓は拡張されたり、溝の再掘削が行われた痕跡が認められる。

第15次調査区では、弥生時代後期の遺構が検出されている。このことから集落は時期によってその中心域がずれていることがわかった。

出土遺物として弥生土器が溝などから多数出土している。石器には、磨製石斧、石庖丁、石剣、



第2図 トレンチ配置図



第3図 遺構平面図

石鏃などがある。磨製石器の材料である粘板岩が遺構の中から多数発見されており、長さ40cmを  
 超すものも存在する。碧玉製の管玉やその未製品などの玉造り関連遺物が発見されている。

### 3. ま と め

亀岡盆地では、9号線関係の発掘調査に代表されるように、亀岡盆地を貫く桂川の西岸の発掘  
 調査成果が知られているが、近年、池上遺跡の所在する東岸地域の発掘調査事例が増えてきてい  
 る。東岸地域には、国分寺跡、国分尼寺跡、丹波一宮(出雲神社)、亀岡盆地最大の前方後円墳千  
 歳車塚古墳(全長約80m)が所在する。この地域の発掘調査の進展によって、亀岡盆地の歴史がよ  
 り正確なものになっていくと考えられる。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第2係調査員)

# おおぶち 大淵遺跡第4次の発掘調査

戸原 和人

## 1. はじめに

この調査は、国営農地ほ場整備事業に伴う事前調査である。本調査は、平成13年度から開始し、本年の調査は2年度目となる。

昨年度調査を行った保津車塚古墳は、二重の堀を持ち、墳丘の長さが約36mの前方後円墳であることが明らかになった。また、案察使遺跡の調査で検出された土坑群は、弥生時代後期に形成された粘土採掘の坑群や土器棺墓群であることが明らかとなった。

今回調査を行った大淵遺跡の調査地点は、亀岡市保津町ホクソ田・堂ノ前にあたる。大淵遺跡は愛宕山の西側で、牛松山の西に広がる沖積地上に立地している。

調査は、京都府教育委員会が試掘調査によって遺物包含層を確認した2地点に、C地区約200㎡、D地区約1,600㎡の調査トレンチを設定し、実施した。

## 2. 検出遺構

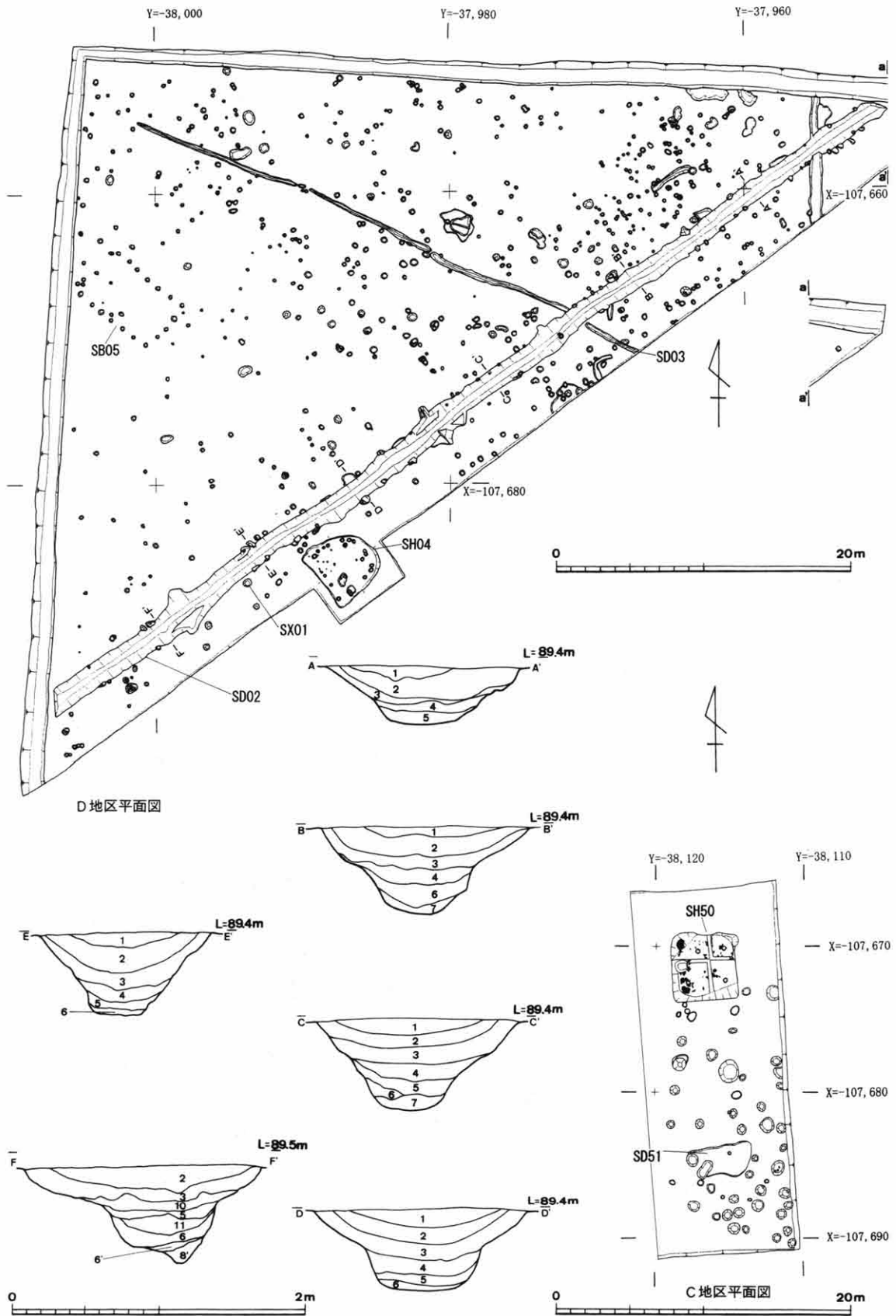
調査によって検出した遺構の概要は以下のとおりである。

C地区では、礫層をベースとし、その上面で中世の溝や土坑、古墳時代の住居跡などを検出した。溝S D51 幅約1.8mの東西溝で、深さ約5cmが残っており長さ4.5mを検出した。溝の埋土は青灰色の粘質土で小礫が混じるもので、埋土中からは瓦器椀・瓦質羽釜の破片などが出土した。

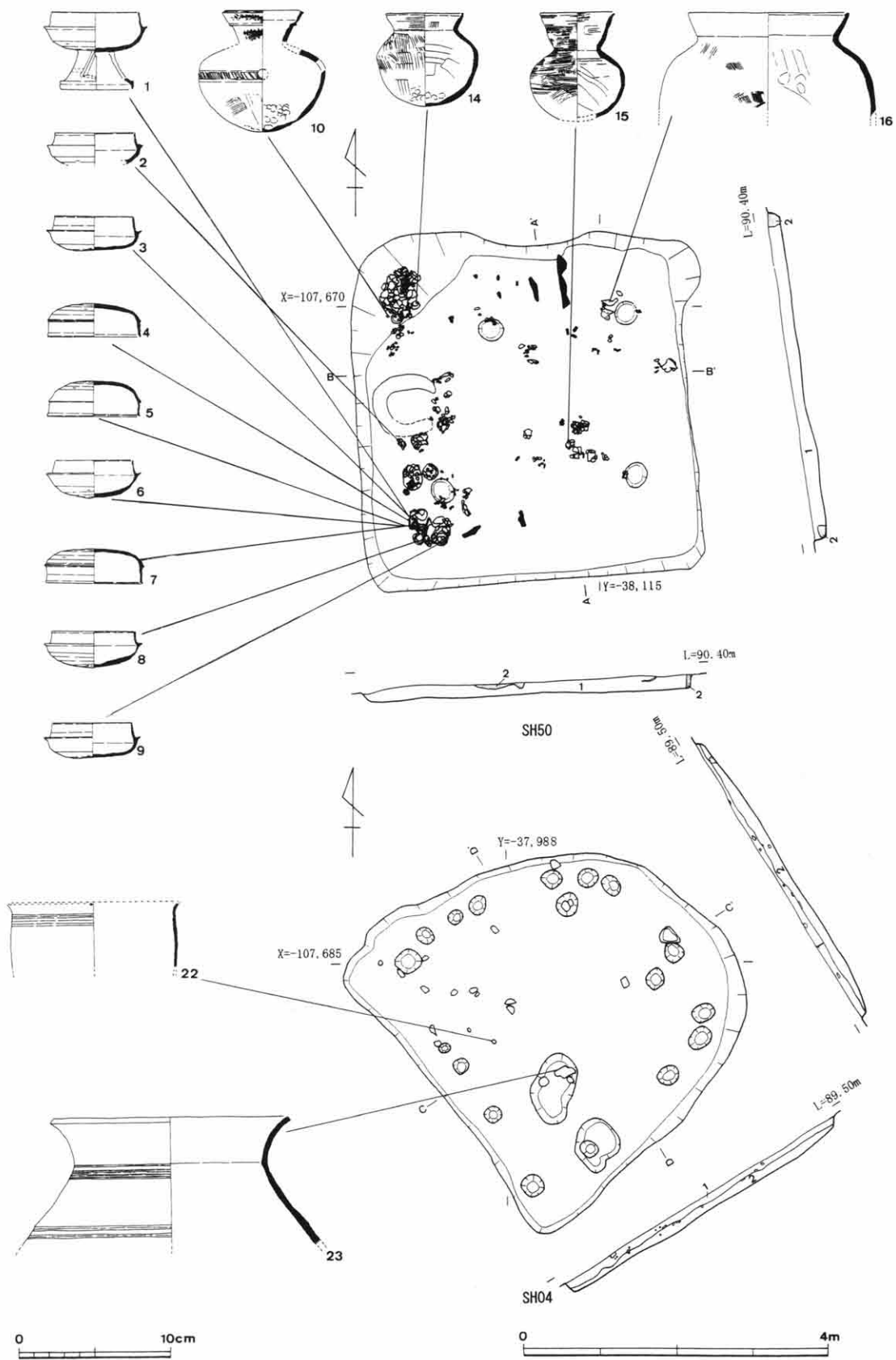
竪穴式住居跡S H50 東西約3.8m、南北約3.0mを測り、焼土や炭化木の検出状況から焼失住居と考えられる。住居の中からは、四隅に近い場所から須恵器・土師器の壺や甕などが出土して



第1図 調査地位置図(亀岡市遺跡地図より)



第2図 C・D地区実測図



第3図 竪穴式住居跡SH04・50実測図



いる。

D地区では、黄褐色の粘質土をベースとし、縄文時代から室町時代にかけての、各時代の遺構を検出した。

**溝S D02** 調査地の南辺で検出した北東から南西に水の流れる、直線に掘られた溝である。幅約1.5～2.0m、深さ約0.4～0.7mの規模が残っており、検出した長さは約69mを測る。溝の最下層からは飛鳥時代の須恵器杯が出土しており、中層からは奈良時代の須恵器杯が出土した。

**橋・堰状遺構** 溝S D02の肩部には、十数か所で一段掘り下げた跡を溝の両岸で検出した。これらの掘り込みには、板などを渡し、簡単な橋がかけられて、両岸の行き来で使用されていたと考えられる。また、溝内の斜面には、直径10cmぐらいの穴が数十か所で掘られており、柱や丸太材などを埋めた跡と考えられる。溝内の構造物としては、溝を塞ぎ止めて水を周辺で利用するための堰があったことなどが考えられる。

**掘立柱建物跡S B05** 調査地の西よりで検出した梁行が約3.6m、桁行が約6.0mの建物跡である。時期の決め手となる土器が出土していないため正確な時代はわからないが、埋土の状況などから飛鳥時代以前で弥生時代以降と考えられる。この建物の床面積は約21.6㎡(約6.5坪)である。調査地内では、この建物のほかにも数多くの柱穴を検出しており、小型の建物が建っていたと考えられる。

**竪穴式住居跡S H04** 調査地の南よりで検出した長軸4.6m、短軸4.0mを測る平面半円形の住居跡である。住居跡からは、弥生時代前期の壺・甕とともに石器を製作した時のものと考えられるサヌカイトの剥片が住居の西北辺付近から出土している。また、同場所には約50cmの範囲に焼土の分布が認められ、炉の跡と考えられる。

**溝跡S D03** 調査地内の中央で検出した北西から南東方向に水の流れる溝である。検出した幅約0.1～0.3m、深さ約5～10cm、断面「U」字形をしており、長さ約37.5mを測る。溝の中からは、弥生土器、凹基式打製石鏃などが出土した。

**甕棺S X01** 調査地の南西で検出した長軸約0.8m、短軸約0.4m、深さ約0.1mの縄文土器の甕を2個使用した墓である。大半が削られており詳しい時期は不明であるが、概ね縄文時代晩期のものと考えられる。

### 3. まとめ

今回の調査では、縄文時代から奈良時代、中世にかけての、各時代の遺構を検出した。縄文時代では墓跡を検出し、弥生時代では、溝、住居跡を検出した。当地の周辺には、弥生時代の集落が広がっている可能性が指摘できる。続く古墳時代も調査地周辺では初めての住居跡の検出となり、前時代に引き続き集落が営まれていたと考えられる。飛鳥時代になると大規模な用水路を検出し、調査地南西方向の水田畦畔には、その延長の痕跡を留めている。当地域の生産基盤が整備されてきたことを示す資料と言える。

(とはら・かずと＝当センター調査第2課調査第1係主任調査員)

# 八幡市<sup>おんなだに</sup>女谷・<sup>あらさか</sup>荒坂横穴群における改葬の実例

岩松 保・上田真一郎

## 1. はじめに

平成12年度より3年間にわたって、第二京阪自動車道路の建設に伴い、八幡市域で女谷・荒坂横穴群の調査を実施してきた。この一連の調査では、総数50基の横穴を調査し、その成果については、当調査研究センターの刊行物に随時発表してきた<sup>(注1)</sup>。

多くの成果のうち、特に、これらの横穴の保存状況が極めて良好であったため、南山城地域における横穴の構造について新たな知見を得ることができた。また、良好な状態で人骨が出土し、これらの出土状況を詳細に検討することで、当時の葬送儀礼を考える資料として重要なものであることが判明した。この二つの視点については、『京都府埋蔵文化財情報』にその一部を発表している<sup>(注2)</sup>。

前稿を発表して以後、新たに女谷横穴B支群1・16～18号横穴の調査を実施したところ、この調査でも良好な人骨の出土を見た。現在、報告書作成のために整理作業を行っており、人骨の出土状況について、一定の見解を得ることができた。この小文では、人骨の出土状況を具体的に報告し、前稿の内容の一部を補足・修正したい。

なお、現地調査および人骨の整理作業においては、京都大学人類学研究所片山一道先生に多大なご助言・ご教示をいただき、骨の取り扱い方から骨の同定および死亡推定年齢、生前の身体的特徴に至るまで、専門的な指導を受けた。現地および室内での人骨の観察・整理作業は、上田が中心になって行った。1.はじめにと、3.まとめについては、岩松が、2.出土人骨の概要および付表については、上田が執筆・作成し、岩松が一部手を加えた。この小文をまとめるにあたって、片山先生より有益なご助言をいただいた。先生の意を汲めずして、はからずも事実誤認をしている点については、執筆者二人が責を受けるものである。

## 2. 出土人骨の概要

### 1)横穴出土人骨の概要

女谷横穴B・C支群、荒坂横穴B支群の調査においては27体の人骨が出土した。そのうち、出土状況がわかるものが21体あり、6体については遺存状態の悪さから詳細は不明である。人骨が出土した横穴は13基あり、単数の出土が5基、複数の出土が8基となる。

各人骨を安置する方向は、東西南北の方位を志向しているものではなく、後述のように、集骨A・Bとも個々の横穴の主軸を意識しているようである。また、玄室内のどの位置に置かれるのかについては、埋葬人数が単数・複数に関わらず、定まった位置にあるとは言い難い。ただ、横

穴の主軸線上に人骨を置くものは認められず、いずれかの側に寄せられている。

人骨の集積タイプは2タイプに分類できる。1は、四肢の長管骨および体幹骨を1か所に集骨し、それとは別に頭蓋骨を置いているものである。長管骨はその長軸を揃えて積み重ねられていることを基本とする。体幹骨・長管骨ともに関節部に交連をほとんど残さない上に、各骨が解剖学的位置をとどめないことが共通し、この点から、明らかに改葬されたものと言える(集骨A)。このタイプが大半を占め、17体でそれを確認できる。

一方、4例では、手脚の関節部に交連が認められたり、手脚の配置に解剖学的な位置関係が認められて、一見すると全体的に伸展位の状態に安置されている。ところが、これら交連した骨の下位や周辺には、その他の多くの骨がはずされてバラバラになっており、ある時点で骨が動かされたことは間違いない。骨の保存状況が良く、その細かな状況が観察されるのは1例しかなく、その他の3例に普遍化できるかは確証はないが、一応、上記の内容がこのタイプの特徴と考えたい(集骨B)。

集骨Aの場合、集骨の方向は横穴の主軸に平行ないし直交している。17体のうち、11体は横穴主軸に平行し、3体が直交と平行とが混在し、3体は判別できなかった。また、頭蓋骨は12体で遺存しており、長管骨が集められている箇所から離れた位置に頭蓋骨が置かれているものが11体ある。頭蓋骨と長管骨の集骨部との位置関係は、頭蓋骨が奥壁側もしくは玄門側に置かれており、側壁側になる例はなく、横穴の主軸を意識して置かれていると言える。頭蓋骨と下顎骨が遺存している場合には、この両者も離して配置される傾向が強く、9体中6体でその状態を確認した。この場合、それぞれの位置関係に一定の傾向は見られない。とは言っても、遺存する頭蓋骨の多くは破損ないしは横転しており、安置時の原位置を特定できないのが実状である。

長管骨については、まず上肢長管骨と下肢長管骨を選別せずに同一箇所に混在して置く場合と、選別した上で別々に置く場合とがある。集骨Aの17体中うち、10体で長管骨の出土状況を詳細に観察でき、そのうち8体が前者のタイプである。この場合には、2段程度に重ね置くものと、平面的に並べるものがある。いずれの場合も、上肢と下肢、左右を分類しないで、長管骨の長軸の方向だけを合わせる傾向にあるが、重ね置くもののなかには、直交方向に骨を置いている例も認められる。また、平面的に配置するタイプと言っても、このタイプは2例しかなく、元々は重ね置かれていたものが、崩れ落ちた可能性もある。一方、上肢と下肢の長管骨を選別して、異なる場所に置く例は2例が認められる。上肢長管骨と下肢長管骨の群を横列に配置するものと、縦列に配置するものがある。

集骨Bの伸展位様の状態を呈するものでは、各部に関節の交連状態が見られること、全体的に各骨が解剖学的位置をとどめていることを共通する。ただし、4体の出土例すべてにおいて、骨の配置に解剖学的位置に無いものや関節が交連していないものを含んでおり、この点で自然に骨化したままの伸展位とは断言できない。そのためここでは、“伸展位様”という呼称を用いることとした。また、遺存状態の悪さから推定で判断した部分も含んでいる。

このタイプは4例認められ、すべて横穴主軸にほぼ平行して置かれていた。いずれもどちらか

の側壁に寄っている。女谷横穴B支群17号横穴では、5体中2体がこのタイプと考えられ、それぞれ異なる側壁に近接しておかれていた。このタイプの人骨は、すべて複数体の人骨が出土している横穴で見つかっているが、ほかの人骨と重複関係を有さない。

集骨A・Bに共通して、改葬される際に、集められる骨は選別されていないようである。骨の遺存状態の悪さのために、骨の同定・観察が困難な場合を除き、概ね全身に及ぶ各骨が集骨されているからである。改葬に際して、肋骨・椎骨などの細かな骨を省いて、頭蓋骨や四肢骨・骨盤の骨を選別する例もあるが、当横穴群ではそのような状況は見られない。<sup>(注3)</sup>

その中でも、骨盤を形成する両腰骨には特別な意識が働いたような印象を受ける。両腰骨が遺存していた例は全27体中2体しかないが、そのいずれも左右の腰骨に分けて、大腿骨の上に重ね置いていた。とは言っても、片側の腰骨のみが遺存する例の中には長管骨の下から出土した例もあり、一くくりに言えない可能性もある。

また、頭蓋骨および下顎骨においては、臼歯が釘植しているのに対して切歯・犬歯が遊離したり、損失している場合が多い。これについては、抜歯などの生前の風習である可能性も考えられる。<sup>(注4)</sup>しかし、生前に歯が欠落した場合には1年程度でその歯槽は閉鎖するが、出土人骨の歯槽にはそのような状態は見られないので、死亡後に欠落したものと言えよう。実際、欠落している歯が遊離歯として出土する場合も認められる。

## 2) 出土状況の2態

ここでは、先述の当横穴群における人骨の出土状況の具体例を見たい。集骨Aとしては、人骨1・7・17、集骨Bのものとしては人骨12・26を挙げる。それ以外の事例については、付表を参照されたい。

### ①集骨A

#### <人骨1>

人骨1は女谷横穴B支群1号横穴で出土した。人骨は、上肢長管骨と下肢長管骨がそれぞれ軸を揃えて、約10cm離れて別々に集められている(第1図)。頭蓋骨は奥壁側に位置し、これらの長管骨群とは東西方向に約30cm離れている。頭蓋骨は破片のみが出土した。下顎骨は頭蓋骨から約15cm離れた位置で出土したが、破損が著しいため原位置の詳細は不明である。

下肢長管骨の集骨内では、左右の大腿骨や脛骨、腓骨が軸を揃えて1か所に積み上げられていた。その方向は横穴主軸に平行する。この中には肋骨や手足の骨なども数点含まれていた。腰骨はこの集骨部の南に隣接して置かれており、それらの骨と



第1図 人骨1検出状況(北東から)

付表 女谷・荒坂横穴群出土人骨一覧

番号	横穴群	横穴	出土状況	同定可能な残存骨				性別	身体的特徴	死亡年齢	タイプ
				頭蓋骨	体幹骨	上肢骨	下肢骨				
人骨1	女谷B	1号	上肢と下肢の長管骨が別々。頭蓋骨は下顎骨と分離。下肢長管骨の集骨内に肋骨や手足の骨がある。腰骨はこの集骨に隣接	頭蓋底の一部、上顎骨・下顎骨とそれに釘植する歯	肋骨、椎骨(遺存状態悪く、詳細不明)	左右上腕骨、尺骨1、中手骨? 1	右腸骨(?), 左右大腿骨、左右脛骨	不明	不明	壮年(25歳~40歳程度)?	A
人骨2	女谷B	1号	歯の破片と骨種不明骨片が1か所で出土	歯はエナメル質片のみ		長管骨(?)骨体。骨種不明骨片数点		不明	不明	不明	不明
人骨3	女谷B	9号	正位に置かれた須恵器杯蓋内の土の上より歯1点	大臼歯?の歯冠部				不明	不明	不明	不明
人骨4	女谷B	11号	頭部、上肢長管骨群、下肢長管骨群の順に並ぶ	左側頭骨から後頭骨		上肢長管骨(?) 2	下肢長管骨(?) 2	男性	不明	不明	A
人骨5	女谷B	11号	人骨4に隣接して、細片の骨。歯は奥壁側に位置	大臼歯の歯冠部2個とエナメル質の破片				不明	不明	壮年後半以降か	不明
人骨6	女谷B	12号	頭蓋骨に近接して骨種不明の骨片	右眼窩上縁、前頭骨、右側頭骨、頭頂骨		長管骨(?)		不明	不明	不明	不明
人骨7	女谷B	15号	上位に頭蓋骨、中位に長管骨・下顎骨、最下位に肩甲骨・肋骨・椎骨・手足の骨。長管骨は上肢と下肢が1か所に集骨され、左脛骨のみ交差。右橈骨は最下層	前頭骨の眼窩上縁部から頭頂骨と後頭骨。上顎および下顎とそれに釘植する歯	肋骨骨体数点、椎骨2	左鎖骨・肩甲骨、左右上腕骨・尺骨、右橈骨・第4中手骨	腰骨(腸骨?)、左右大腿骨・脛骨、右距骨、左立法骨	男性	全体に体格の良い人物。身長は不明。脛骨の骨体断面積は右側のほうが一回り近く大きい	壮年後半	A
人骨8	女谷B	16号	頭蓋骨は右側頭部を下に横位で出土。下顎骨とは約5cm離れる。骨種不明の骨片が下顎骨上やその周辺より出土	右側頭骨と後頭骨の一部、ほぼ完形の下顎骨、歯は両中切歯以外が釘植				不明	不明	20歳前後か	A
人骨9	女谷B	16号	頭蓋骨は右側頭部を下にして、下顎骨と約20cm離れる。頭蓋骨と約40cm離れて長管骨等が集骨。集骨内には、最上位に脛骨・大腿骨、下位に腰骨・上腕骨	右側頭骨と右前頭骨および右後頭骨の一部、上顎骨および下顎骨とそれに釘植する歯	椎骨1	肩甲骨1、上腕骨1、尺骨、基節骨(?)骨体3程度	腰骨、大腿骨、脛骨、中足骨?				A

人骨10	女谷B	16号	歯の破片と下顎骨(?)に近接して耳環2点	歯の破片と下顎骨(?)		尺骨もしくは橈骨骨体部	下長管骨?	不明	不明	不明	不明
人骨11	女谷B	16号	磔床上で、頭蓋骨・下顎骨が同一箇所に置かれ、約40cm離れて長管骨が集骨	頭蓋底と側頭骨、後頭骨周辺の骨片、左の下顎角周辺部分		尺骨骨体部	下長管骨?	不明	不明	不明	A 壮年後半以降?25歳程度まで?
人骨12	女谷B	17号	伸展位様に出土。上顎骨は頭蓋骨に接するが、下顎骨は約20cm離れる。腕や脚の骨は頭蓋骨を基準に見ると解剖学的位置にある。肘関節・膝関節は交連の位置にあり、尺骨と橈骨の位置関係も解剖学的な位置を示すが、腓骨の痕跡は脛骨と解剖学的位置にない	頭蓋骨(?)骨片数点、上顎骨・下顎骨には若干の歯		左右上腕骨、左尺骨・橈骨	左右大腿骨・脛骨、左腓骨	不明	不明	不明	B 壮年前半段階
人骨13	女谷B	17号	上腕骨・尺骨・左大腿骨・脛骨が集められ、その上位に右大腿骨が直交してある。下位に肩甲骨・腰骨・手足の骨片がある。頭蓋骨はこの集骨の奥壁側	頭蓋骨片が数点、下顎骨は歯槽部のみ	椎骨1	肩甲骨1、上腕骨1、尺骨1遺存。基節骨(?)骨片2	腸骨(?)1、左大腿骨・脛骨、中足骨1	不明	不明	不明	A 20代後半~30代前半
人骨14	女谷B	17号	人骨13と人骨15・16の間で長管骨が集められており、方向がそれらの人骨と異なっている。別個の人骨と判断。大腿骨・脛骨・上腕骨・尺骨・腰骨状の骨	下顎骨の大臼歯が1個遺存		左上腕骨、尺骨1、中手骨1	左大腿骨・踵骨、右脛骨	不明	不明	不明	A
人骨15	女谷B	17号	土色・土質の違いが認められるのみ。頭部から5cm程度離れて下顎骨があり、大腿骨は、頭蓋骨を基準に考えると解剖学的な位置近くにある。	頭蓋骨・下顎骨ともに土色、土質の違いが残るのみ			大腿骨1	不明	不明	不明	B
人骨16	女谷B	17号	土色、土質の違いだけで、頭蓋骨と大腿骨を認める。大らしき痕跡と大腿骨と約20cm離れて出土	遺骸による土色、土質の違いが残るのみ			左大腿骨骨体	不明	不明	不明	A

番号	横穴群	横穴	出土状況	同定可能な残存骨				性別	身体的特徴	死亡年齢	タイプ
				頭蓋骨	体幹骨	上肢骨	下肢骨				
人骨17	女谷C	5号	人骨18に先行。頭蓋骨は下顎骨と約15cm離れて正立し、隣接して骨が集まる。最下位に左右の大腿骨、その上に左右の腰骨、その上に右腕骨・左尺骨・右腓骨が置かれ、最上位に左脛骨・右胫骨が直交。肩甲骨・鎖骨・肋骨・椎骨・手足の骨等は、長管骨や骨盤の間より出土。椎骨に交連しているものはない	頭蓋骨はほぼ完形で残り、上顎骨および下顎骨には一部が釘植	肋骨20個、椎骨19個、仙骨	左右鎖骨・肩甲骨・上腕骨・右肘骨・右第2・3中手骨、左第2・3中手骨、左第4中節骨	左右腰骨・大腿骨・脛骨・腓骨・(踵骨・立方骨)、右距骨、左舟状骨、右第4中足骨、左第1～第4中足骨、右第1基底骨、右第1基底骨	男性	身長約150cm。下半身はそれほど強くないが、上半身はそれ以上に強いが、左の尺骨、腕骨に骨折痕跡がある。骨折は青年期以前か	壮年(25～40歳)後半段階	A
人骨18	女谷C	5号	人骨17に後出。頭蓋骨は下顎骨の上から約5cm離れて出土。頭蓋骨は、頭蓋骨に隣接して集められ、上位に腰骨・長管骨、下位に椎骨や肋骨がある	右側の眼窩上縁部、上顎骨および下顎骨とそれに釘植する歯	第1肋骨、肋骨骨片数点、頸椎3、胸椎3	左鎖骨	腰骨の一部と大腿骨の一部、右脛骨	不明	不明	5歳までの段階	A
人骨19	女谷C	5号	頭蓋骨は左側頭部を下にして出土し、約15cm離れて大腿骨などの長管骨が集められている。長管骨以外の骨も残るが、風化の進行が激しく判別できない	頭蓋骨左半部が遺存。上顎骨には左第2小臼歯から第3大臼歯に至る4本が釘植		肩甲骨ないしは腰骨片数点、長管骨数点		不明	不明	15歳程度以上25歳程度まで	A
人骨20	女谷C	7号	長管骨が平行して置かれ、間から歯が出土。その他の骨は、土色・土質に違いを残す程度	大臼歯の歯冠部、歯冠部と思われれるエナメル質の破片				不明	不明	壮年段階	A
人骨21	女谷C	7号	長管骨と骨種不明骨片がまとまって出土			長管骨の骨体		不明	不明	10歳前後?	不明
人骨22	荒坂B	2号	頭蓋骨は下顎骨とは15cm離れ、下顎骨から約20cm離れて上肢・下肢の長管骨が集められる。骨種不明骨片が長管骨の間から出土。頭蓋骨出土位置周辺に朱	右眼窩・頬骨・上顎骨・前頭骨・側頭骨・後頭骨・頭蓋底および左側頭骨の一部		上肢および下肢の長管骨?数個		不明	不明	不明	A

人骨23	荒坂B	5号	長管骨が横穴主軸方向とそれに直交する方向に分かれて出土。その他の骨は遺存状態が悪く観察不可	頭頂骨と思われ骨片が数点		長管骨? 数点		不明	不明	不明	不明	A
人骨24	荒坂B	5号	骨の並びは伸展位の状況。上腕骨・下長管骨を基準に解剖学的位置に近い。下長管骨はなと判断される一群内に他の骨はなとく、上長管骨周辺より不明骨片が出土。各関節部での交連状況を確認できない	頭頂骨と判断される破片から約20cm離れた長管骨が集骨部内から出土	頭頂部付近(?)の骨片	上肢の長管骨? 数個	下肢の長管骨? 数個	不明	不明	不明	不明	B
人骨25	荒坂B	8号	頭蓋骨と判断される破片から約20cm離れた長管骨が集骨部内から出土	頭蓋骨と判断される破片から約20cm離れた長管骨が集骨部内から出土	頭頂部付近(?)の骨片	上肢長管骨(?)		不明	不明	不明	不明	A
人骨26	荒坂B	18号	頭蓋骨は下顎骨と約15cm離れる。頭蓋骨に接して、上肢長管骨・鎖骨・肩甲骨・椎骨・肋骨などがバラバラに置かれていたが、一部の椎骨と右手甲骨・基節骨に交連が認められた。この上に両脚が置かれ、関節に交連が認められる部分がある。左脚と右脚の位置関係は解剖学的な位置にはない。骨盤を形成する左右の腰骨と仙骨は各骨に分割され、右大腿骨の上に置かれる	頭蓋骨は左の側頭葉、眼窩、頬骨を欠くのみで、ほぼ完全。上顎骨および下顎骨に歯が釘植	肋骨20程度、椎骨13。胸椎と腰椎で1か所ずつの交連がある。仙骨	左右鎖骨・肩甲骨・左右上腕骨、左右尺骨、右橈骨	左右腰骨・大腿骨・左右脛骨・腓骨	男性	生前は上下半身ともに華奢な体格の持ち主	壮年後半段階	B	
人骨27	荒坂B	18号	人骨26の奥壁側に隣接。幅20cm程度の幅の中に長管骨・歯が集められる	大白歯と思われ歯冠部数個		上肢(?)長管骨		不明	不明	不明	不明	A



は重複関係を有さない。

上肢長管骨の集骨内では、右上腕骨や前腕骨と判断される骨片などが出土した。これらの一群は下肢骨の一群と軸を揃えて平行に置かれていた。

頭蓋骨と下肢長管骨との間からは、椎骨や肋骨、骨種不明骨片が数点出土した。

#### <人骨7>



第2図 人骨7検出状況(北西から)



第3図 人骨17・18検出状況(北西から)



第4図 人骨17検出状況(北から)

人骨7は女谷横穴群B支群14号横穴で検出した。この人骨は1か所に集められており、大きく3層に分かれていた。頭蓋骨が最上位にあり、中位には長管骨や下顎骨などがあり、最下位には肩甲骨・肋骨・椎骨・手足の骨などが置かれていた(第2図)。

頭蓋骨は大きく破損していたために原位置は分からなかったが、破片は奥壁側に集中して出土した。下顎骨は前面を玄室の開口部方向に向けて、頭蓋骨片の下位にあった。上肢と下肢の長管骨は横穴主軸方向にほぼ平行して「川」の字様に並べられており、左脛骨のみ右大腿骨の上に交差した状態であった。頭蓋骨・長管骨以外の骨は最下位に不規則に置かれているが、右橈骨のみ最下位の一群から出土した。

#### <人骨17>

人骨17は、女谷横穴C支群5号横穴で出土した。検出時には、人骨17は人骨18と重なった状態で出土し、一見すると互いの骨が乱雑に集積されているようであった(第3図)。観察と記録を繰り返して取り上げた結果、人骨17は幅約60cmの範囲に散らばるのに対して、人骨18はその南西一角に集中していること、人骨18は人骨17の上に載り、人骨17の下から

の出土は無いことが判明し、人骨17が人骨18に先行して配置されたと判断した。

人骨17の頭蓋骨は人骨17・18の集骨部に隣接しながらも、重複関係を有さずに別個に正立して置かれていた。玄門東側壁方向を向き、下顎骨とは約15cm離れた位置にあった。上顎骨と下顎骨の遊離歯は、頭蓋骨から離れて、ほとんどが腰骨の下から出土した。

まず最下層に左右の大腿骨が横穴主軸に平行して「二」の字様に並べられており、骨盤を形成する左右の腰骨と仙骨は分離されており、左右の腰骨は重なった状態で大腿骨上に置かれていた。仙骨は両腰骨から10cm程度離れ、別に置かれていた。大腿骨と腰骨の間には、肋骨・椎骨などの骨が乱雑に置かれていた(第4図)。腰骨を置いた後に、右上腕骨・左尺骨・右脛骨が大腿骨と同方向に置いている。これと相前後して、肩甲骨・鎖骨・肋骨・椎骨・手足の骨を乱雑に置いた後に、左脛骨・左右の腓骨を左右の大腿骨に直交する方向に並べている(第3図)。椎骨の遺存点数は多かったが、いずれも交連状態にはなかった。

四肢の長管骨・頭蓋骨・下顎骨・骨盤といった主要な骨は、意識的な配置がなされているようであるが、肩甲骨・鎖骨・肋骨・椎骨・手足の骨といった小さめの骨については意図的に集められた様子はなく、長管骨や骨盤置く際に、分散して置かれているようである。

## ②集骨B

### <人骨12>

女谷横穴B支群17号横穴からは、人骨12～16の5体の人骨が出土しているが、すべて保存状態が悪い。このうち、人骨12と15が集骨Bと判断される。

人骨12はいわゆる伸展位の状態で出土した(第5図)。頭部を玄室開口部方向に向け、伸展方向は横穴主軸に平行する。上顎骨は歯の咬合面を上に向けた状態で、頭蓋骨に接して出土した。頭蓋骨と上顎骨が分離しているかどうかについては、頭蓋骨の破損が著しいため観察できなかった。頭蓋骨と下顎骨は約20cm離れ、頭蓋骨を基準に見るなら下顎骨は解剖学的位置を大きく外れる。腕や脚の骨は頭蓋骨を基準に見ると解剖学的位置をとどめており、肘と膝関節は交連の位置関係にあると判断した。痕跡のみの検出であるが、左尺骨・橈骨および左腓骨の状況を見ると、まず尺骨と橈骨の位置関係は交連の状態であった。腓骨は、本来ならば脛骨の外側にあるべきものが内側にあり、解剖学的位置とは逆位にあるため、脛骨との交連はなかった可能性が考えられる。

### <人骨26>

人骨26は、荒坂横穴B支群18号横穴で出土した。人骨26は集骨Bの中で最も残りが良く、各骨の出土状況がよくわかるものである。

人骨26の頭蓋骨は出土範囲全体の最も開口部側に位置し、頭頂部を西



第5図 人骨12検出状況(南南東から)

側壁に、頭蓋前面を奥壁方向に向けて横転していた(第6図)。下顎骨とは約15cm離れる。頭蓋骨に接するように、体幹骨や四肢骨の集骨部が認められる(第7図)。集骨部の下位には、上肢長管骨・鎖骨・肩甲骨・椎骨・肋骨などが乱雑に置かれている。これらの骨の中には、わずかであるが、交連状態を保っているものがあった。椎骨では、隣接する2個で交連が見られる程度であるが、右手中手骨と基節骨とはほぼ完全に交連していた(第8図)。この上位に、左右の脚の骨が伸展した状態で置かれている。足下から頭を見た場合、左側に右脚が、右側に左脚が位置している。さらに、骨盤を形成する左右の腰骨と仙骨は各骨に分割され、右大腿骨の上に重ね置かれた状態であった。



第6図 人骨26検出状況(南南西から)



第7図 人骨26体幹骨集積細部(北から)



第8図 人骨26右手検出状況(南から)

展した状態で置かれている。足下から頭を見た場合、左側に右脚が、右側に左脚が位置している。さらに、骨盤を形成する左右の腰骨と仙骨は各骨に分割され、右大腿骨の上に重ね置かれた状態であった。

左右の脚の状況について詳しく見ておきたい。右脚については、脛骨と腓骨および距骨とが交連したり解剖学的な位置関係を有していた。しかし、大腿骨と脛骨とは、脛骨以下が前後反転しており解剖学的な位置関係にはなかった。大腿骨の上面が前面であり、脛骨以下は上面が後面であった。ところが、大腿骨と脛骨の間には膝蓋骨が遺存していたので、本来は膝関節でも交連していたのが、脛骨以下が自然に反転もしくは人為的に反転させられた可能性が考えられる。左脚については、大腿骨・脛骨・腓骨・距骨が解剖学的な位置にあり、さらに、距骨から中足骨の一部までも解剖学的な位置にあり、左脚全体が交連していたものと推定される。ただし、左脚全体に、上面が後面であるので、左右の脚の前・後の関係が自然な位置関係ではない。これについては、仰臥の位置関係で両脚が置かれた後に、右脚は脛骨以下が、左脚は大腿骨以下が全体に外

側に反転したと考えれば、検出した状況と辻褃が合う。

以上をまとめると、両脚および集骨内の上肢長管骨の方向は、横穴の主軸方向にほぼ平行するが、椎骨・肋骨などには特に意図的な配置は見られず、無作為に置かれたと考えられる。また、両脚が交連状態を保ったままであるのに対して、ほかの骨は細かな骨にまで分割されて置かれているので、遺骸が骨化したといっても、まだ腱や靭帯が残存して骨の関節が繋がっている時点で、体幹骨や上肢骨の骨はが意図的にバラバラにされたものと推定される。まず、これらの骨が集められ、次いで交連状態を保った両脚がその上に並べられたのであろう。そして、骨盤が分割されて、大腿骨の上に置かるのであるが、頭蓋骨がどの時点で据えられたのかは、よく分からない。

### 3. まとめ

女谷・荒坂横穴群の出土人骨は、その残り具合が悪いものもあり、不明瞭なものも認められるが、解剖学的な位置を身体全体に保っているような人骨は全く検出されていない。すなわち、横穴内に遺骸を納め置いて、そのまま骨化したままのものは、全く認められないのである。

人骨の集積状況を大別すると、次の2タイプに分類できた。

**集骨A** 四肢の長管骨を束ねたり、並べ置き、それとやや離れた位置に頭蓋骨を置くもの。多くの場合、そのほかの骨はその長管骨の下位に置いている<sup>(注5)</sup>。

**集骨B** 一見すると人骨の配置は伸展位様を呈しているが、脚などの一部で関節した状況を残すものの、体幹骨などの大多数の骨は人為的にその関節がはずされているもの

これら両タイプは、人骨の配置が解剖学的な位置から大きくはずれているので、いずれも人為的に骨が動かされていることは間違いない。また、これらの骨は、たまたま動かされて、偶然にそのような配置になったものでもなかろう。集骨Bについては類例が少なく、判然としない点はあるが、両タイプとも、ある一定の範型に基づいた骨の配置を指向しており、この点に人骨を動かした人々の意図を読みとることができる。そのため、これら両タイプとも、一連の葬送儀礼の中のある段階で、意図的に改葬されたものと言うことができよう。

集骨A・Bが女谷横穴B支群17号横穴や荒坂横穴B支群5号横穴の同一面で見つかっていることから、それぞれが風習を異にする別個の形式の改葬方法とは考えられず、一連の葬送儀礼の中で執り行われる改葬の段階差と捉えることができる。この場合、骨を動かす大きさの違いから、集骨Bから集骨Aへと、横穴内での儀礼が進行したことは疑い得ない。集骨Bから集骨Aへの改葬の実際は、人骨26の例を参考にすると、まず、上位の下肢長管骨をはずし、下位のバラバラに置かれている体幹骨・上肢骨の中から長管骨だけを選び出す。次いでそれらの長管骨の軸を揃えて束ねた上で、床面に残したままの体幹骨の上に置いたのであろう。頭蓋骨もおそらく正立させて、体幹骨の集骨に近接して置き直しているのであろう。

そうすると、集骨Bの改葬が行われる以前に、遺骸はどこで骨化されたのであろうか。可能性としては、横穴内に置いて骨化させた場合と、横穴外で骨化させて横穴へ移動した場合とが考えられるが、残念ながら、いずれであるかを特定する材料は得られなかった。人骨の並びに、人為

的な改変が加えられていないものは、横穴の中で全く見つからないことから、横穴外で遺骸を骨化させた可能性が高いものと思われる。そして、人骨26で見ると、集骨Bに改葬する時点では、靱帯や腱がまだ残存しており、それらを意図的にバラバラにした可能性がある。

以上、想像を交えた所もあるが、葬送儀礼の流れをまとめると、死骸を横穴外で一定期間にわたって置いた(=殯)後に、遺骸を横穴内に移動し、その際に体幹骨をバラバラにして置き、その上に下肢骨(上肢骨もか?)を元の状態のままに並べ、頭蓋骨を別に置く(集骨B)。そして、ある期間を経た後に、頭蓋骨を据え直し、その前面に散らばっている体幹骨の上に長管骨を揃え置くという、集骨Aへと改葬したのであろう。

a 死→b 骨化(殯屋)→c 改葬(集骨B)→d 改葬(集骨A)

五来重氏は、敏達天皇、用明天皇、舒明天皇などの古代天皇や船首王後が改葬されている例を引き、「死者の霊魂が子孫の供養によってきよめられ、神として祭られるという(日本;引用者注)固有信仰の一変形と考えられる。この『きよめ』がすまぬ間は死者=ほとけは祖先の神霊に仲間入りができなかつたのである。」<sup>(注6)</sup>と述べており、横穴に見る改葬の実例もまた、こういった意識の反映であったのではなかろうか。この文脈に沿って上の図式を解釈するならば、bはよみ返りの希求、cはよみ返りの否定と霊の鎮魂・浄化、dに至ってはじめて死者の霊は祖霊との同化が果たされ、子孫を守護する存在へと昇華したと意識されたのではないだろうか。

(いわまつ・たもつ=当センター調査第2課調査第3係主任調査員)

(うえだ・しんいちろう)

注1 ①岩松保・柴暁彦「第二京阪道路関係遺跡 平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

②岩松保「荒坂横穴B・C支群の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第83号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

③岩松保「第二京阪道路関係遺跡 平成13年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

④岩松保「女谷横穴群(B支群)」(『京都府埋蔵文化財情報』第85号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

⑤村田和弘「荒坂横穴群(A・B支群)」(『京都府埋蔵文化財情報』第85号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

注2 注1の②

注3 片山一道先生ご教示による。

注4 春成秀爾「哀悼抜歯」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第83集) 国立歴史民俗博物館) 2000

注5 タイプAに対するものとして、前稿(p. 8)では“後かたづけ”や“(奥壁)集積”と表現したが、その後の発掘調査および整理作業の結果、本文中のように考えるに至った。現時点では、通常使われる意味での後かたづけ——追葬を行うためのスペースを空けることを目的として、複数個体の骨を奥壁部に乱雑に集積させたものは、女谷・荒坂横穴群の一連の調査では全く認められない。

注6 五来重『日本人の死生観』角川選書 1994 p.21

## 15. 木橋北城跡

所在地 竹野郡弥栄町木橋小字千原崎730ほか  
調査期間 平成14年9月12日～11月21日  
調査面積 約400m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、府道網野岩滝線道路改良2事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

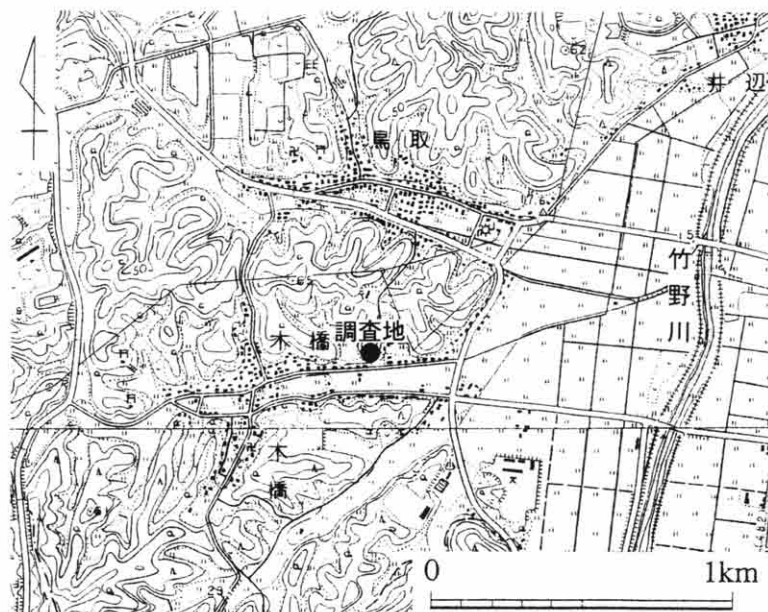
城跡の所在する木橋地区は、弥栄町の水田地帯(中心地)に隣接する、丘陵と谷地形が錯綜した地域に形成された集落である。二つの谷に挟まれた丘陵に木橋城跡(城主吉岡伊豫守)があり、北側の谷を挟んで向かい合った丘陵に木橋北城跡がある。その木橋北城跡の南端部分が道路予定地内に含まれるため発掘調査を実施した。

木橋北城跡の北西約1.2kmに船形埴輪や三角板革綴短甲が出土したニゴレ古墳、製鉄遺跡の遠所遺跡群、ニゴレ遺跡があり、木橋北城跡の所在する丘陵には、鳥取古墳群、鳥取峠古墳群、谷奥古墳群など多数の古墳群が集中する遺跡の密集地域でもある。

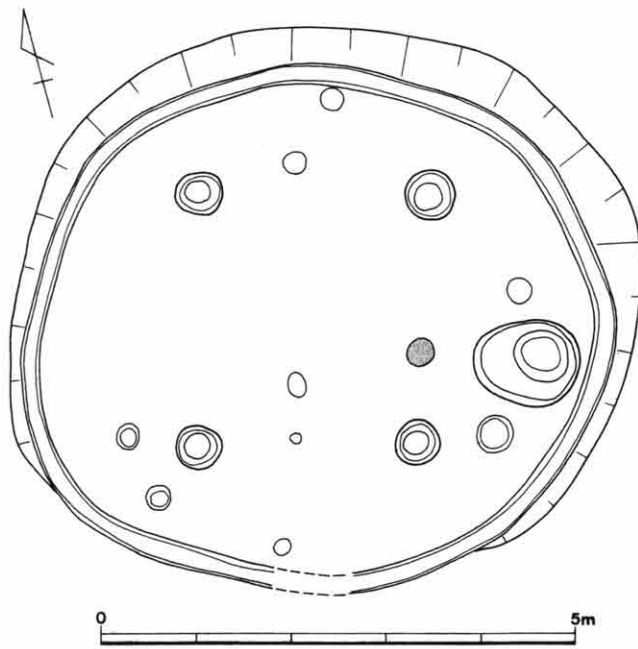
調査にあたっては、京都府峰山土木事務所・京都府教育委員会・弥栄町教育委員会および地元自治会の協力と援助を得た。

**調査概要** 木橋北城跡は、南北方向に2か所の平坦地が並び、南側平坦地は標高34～35m、20×30m前後の方形状である。その南側に12×15mの台形状平坦地があり、これより下位に狭い削平地が数段みられる。上位平坦地の南端(1トレンチ)と台形状平坦地(2トレンチ)と、それらより下位の削平地(3トレンチ)で調査を実施した。いずれの地点とも耕作に伴う畝、溝が観察できた。

1トレンチは、表土下20cm前後で黄褐色系の花崗岩風化土(地山)となる。地山面で掘立柱建物跡と推定される柱穴跡を4か所検出した。建物規模は不明であるが、建物の東



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000網野・峰山)



第2図 竪穴式住居跡平面図

南隅を検出したことになる。

2トレンチでは、北側が表土下約15cmで地山面、中央から南で整地土層となる。整地土層上面で寛永通寶3枚と近世以降の陶磁器などが出土しているが、顕著な遺構は検出されなかった。整地層の下層から弥生時代後期後半の竪穴式住居跡1か所を検出した。住居跡は直径約6mの円形で、最も残りが良い部分で深さ約0.6mを測る。支柱穴、焼土(炉跡)、周壁溝などがあり、床面から少量の土器が出土した。

3トレンチでは、一辺約1mの方形土坑6か所などを検出したが、かつて、墓地であったと伝承があり近世墓と判断されたので、上面での精査のみ行った。表土掘削中に陶磁器、かんざしなどが出土した。

まとめ 今回の調査で掘立柱建物跡1棟を検出した。遺構に伴う遺物もなく、掘削中に近世以降の陶磁器、寛永通寶などが出土しているのみで、建物跡の時期は不明である。調査範囲は城跡の一部だけで、開発の対象とされていない部分には、今回検出した建物跡のほかにも建物跡などがあると推測される。

木橋城跡と向かい合う位置に所在する木橋北城跡は、本城(木橋城跡)の支城(砦)として設置され、不信者・侵入者を見張るためのものであろう。木橋北城跡には、明瞭な堀切や土塁などの痕跡は認められない。

下層から弥生時代の住居跡が検出され、予想外の調査成果となった。弥栄町内では、住居跡が単独で検出された例はほかにもあるが、こうした単独で検出した住居の立地条件や分布状況については、今後の検討課題としたい。

なお、下層から検出された遺構は、弥栄町教育委員会との協議で小字名から千原崎遺跡と呼称することになった。

(石尾政信)

## 16. 福<sup>ふ</sup>知<sup>く</sup>山<sup>ち</sup>城<sup>や</sup>跡<sup>ま</sup>

所在地 福知山市岡ノ二町  
 調査期間 平成14年9月10日～10月30日  
 調査面積 約130m<sup>2</sup>

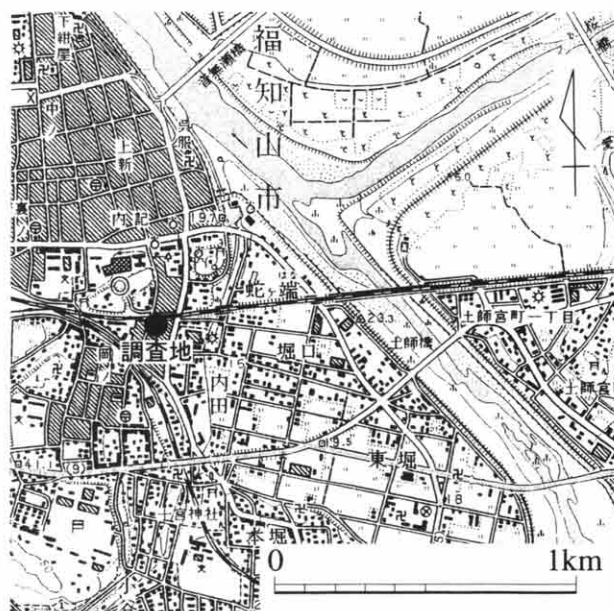
はじめに 今回の調査は、福知山駅付近連続立体交差事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、福知山市街地の南東側にあたり、JR山陰線旧切通踏切の南東側に隣接する地点に位置する。

福知山城は、中世城郭の「横山城」の地に、明智光秀が丹波平定後に本格的な近世城郭を築城したことに始まるといわれている。その後、豊臣氏の時期には杉原氏や小野木氏が入り、関ヶ原合戦以後の江戸時代には有馬氏、岡部氏、稲葉氏、松平氏、朽木氏が入部して藩主となる。松平氏の時期の絵図によると、今回の調査地は「鷹部屋」と記された部分にあたるものとみられる。平成11年度には今回の調査地の東側隣接地を調査し、「鷹部屋」の東側に記された「御泉水」の一部とみられる玉石敷遺構や板石敷遺構などを検出している。

**調査概要** 今回の調査では、明治以降の盛土層の下から幕末以前の4層の整地層(盛土1～4とする)を確認した。上層の盛土1とその次の盛土2の間には、洪水などによるものとみられる粘質土が堆積しており、その中から18世紀後半頃の遺物が出土した。このことから、盛土1は18世紀後半以後、盛土2は18世紀後半以前のものと考えられる。この2層の盛土については上面で多少の地形の凹凸を確認したのみで、顕著な遺構は残存していない。

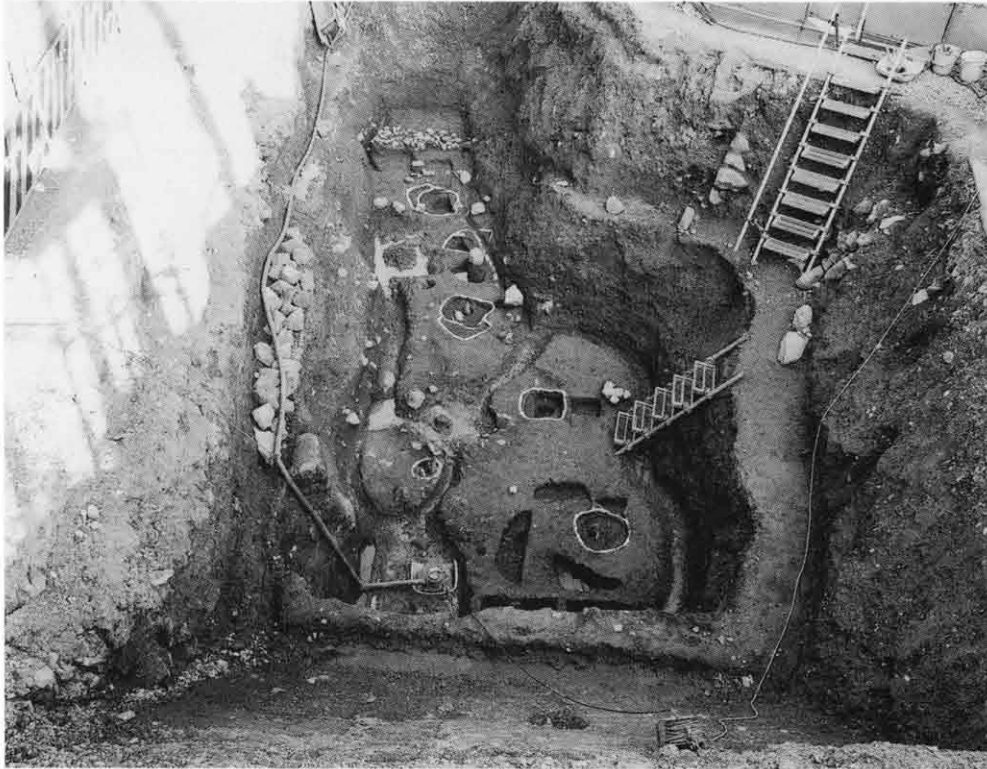
盛土3の面からは、礎石とみられる石や礫敷遺構を確認した。これらは、調査地東半部に集中している。調査地が狭く、具体的にどのような建物が建っていたかは不明であるが、何らかの施設があったものとみられる。この盛土中からは17世紀頃のものとみられる土師器皿が出土した。

盛土4の面からは、掘立柱建物跡とみられる柱跡を8か所検出した。柱跡は、一辺約50～70cmの方形掘形であり、その中に25～35cmの柱を立てていたものとみられる。これらの柱跡の中には切り合っているものがあり、建て替えがあったものと考えられる。建物の規模などについては、調査地が狭く、不明である。柱跡からの出土遺物は



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000福知山東部)





第2図 調査地全景(西から)

17世紀初頭頃のものと考えられ、柱跡や盛土4はその時期のものと考えられる。なお、盛土4の下層は、粘質土が1 m以上の厚さに堆積しており、盛土4による造成が行われる以前は湿地状であったことがうかがわれる。

まとめ 今回の調査では、調査地付近に福知山城跡に関連する各時期の遺構面が比較的良好に残存していることを確認した。また、今回検出した掘立柱建物跡と考えられる柱跡や盛土4は、17世紀初頭頃のものと考えられる。時期的には、慶長五(1600)年に入部した有馬氏による造作と考えられ、調査地付近はいわゆる江戸時代になってから開発されたものとみられる。ただ、今回の調査地はあまりにも狭小であり、それ以前の堀などに該当している可能性も考えられる。調査地の関係で具体的な様相が不明であることは惜しまれるが、今後の調査に期待したい。

今回の出土遺物としては、「□和八年」の年紀を陰刻した瓦質磚がある。この元号については、出土層位から「元和」が妥当と考えられる。元和八(1622)年は、元和七(1621)年から4年間の短期間在城した岡部氏の時期にあたる。この磚は何らかの造作に伴うメモリアルプレートとみられ、在城期間が短いゆえに不明な点が多い岡部氏の事績の一端を物語る資料と言えよう。

(引原茂治)

## 17. 観音寺遺跡

所在地 福知山市観音寺地内  
 調査期間 平成14年5月21日～12月6日  
 調査面積 約2,000m<sup>2</sup>(試掘調査900m<sup>2</sup>含む)

はじめに 観音寺遺跡は、弥生時代中期から中世にかけての遺跡として知られている。特に、弥生時代の遺跡として報告されたのは、大正11年に遡る。青銅製の剣を石で模した磨製石剣が発見されたのが最初である。その後の発掘調査で、弥生時代の集落に伴う竪穴式住居跡・土坑・溝などが次々に確認され、南西側の興遺跡とともに由良川中流域における拠点集落と考えられてきた。また、平安時代から鎌倉時代の集落跡の資料も多く発掘されている

今回の発掘調査は、国土交通省が進める由良川新堤防建設に伴う調査である。遺構・遺物が多量に検出された東側のA地区で本格的な発掘調査を進めた。

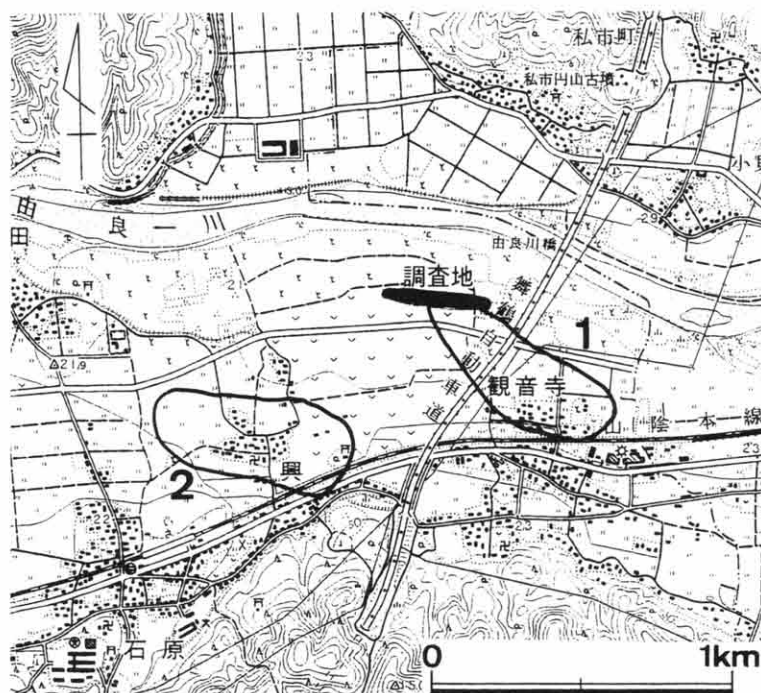
**調査概要** 縄文時代晩期～鎌倉時代の遺構・遺物が検出された。

縄文時代晩期では、方形土坑1基が検出され、ほぼ完形の突帯文土器(深鉢)1個体と打製石斧1点が出土した。

弥生時代のものは、中期の円形竪穴式住居跡1基・多数の土坑・溝、後期の円形竪穴式住居跡1基、後期末の方形竪穴式住居跡1基・土坑・溝が検出された。

弥生時代中期の住居跡は、直径約7.5mを測る。多量の土器が出土したなかに、おそらく昆虫の蟬を表現したであろう土製品(第2図)が出土した。また土坑には廃棄土坑、貯蔵穴などがあるとみられる。概して深いものが多く、なかには深さ1.4mを超えるものもある。貯蔵穴とみられる。溝は、幅50～60cmを測り、深さ約20cm程度のものである。中からは多量の土器が出土した。1基の溝からは磨製石鎌も出土している。

弥生時代後期の円形住居跡は、直径約10mを測る大型のものである。特徴的なのは内



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000福知山東部)

1. 観音寺遺跡 2. 興遺跡



第2図 出土土製品

側が一段くぼむ構造で、周囲にベッド状遺構が設けられていることである。焼土・炭化物が全体に広がっていることから、焼失住居跡とみられる。多量の土器や石器などが出土した。弥生時代後期末の方形住居跡は深いもので残りは良好である。出土土器には器面にタタキ痕を有する甕や、鉢などある。

土坑は弥生時代中期に比べ、浅いものが多い。溝は調査区を東西に貫通しており、集落の内外を区画するものといえる。

古墳時代の遺構は、竈をもつ方形竪穴式住居跡、土坑、溝がある。住居跡は6世紀末から7世紀初頭のものである。土坑は古墳時代

前期のものもある。溝は、調査区中央を東西にはしり、住居跡と同じ7世紀代のものである。

平安～鎌倉時代のものは、多数の柱穴や溝がある。柱穴は掘立柱建物跡を構成していたとみられる。中から瓦器碗や土師器皿などの破片が出土した。また溝は古墳時代の溝にほぼ重なるもので、集落内の排水溝あるいは区画溝と考えられる。須恵器杯や瓦器碗のほか、少量であるが青磁碗などの輸入陶磁器が出土した。

まとめ 以上のように、縄文時代から鎌倉時代にかけて、断続的に集落が営まれていたことが判明した。今回、観音寺遺跡内で初めて検出された縄文時代晩期の遺構や古墳時代後期の竪穴式住居跡群、弥生時代後期の大型住居跡などは重要な発見である。さらに弥生時代中期の遺構からの土器の出土量は圧倒的で、全体の遺物量のほぼ7割を占めている。従前から言われているように、当期における集落の盛行ぶりがうかがえる。遺構と土器の詳細な分析は、今後の重点課題といえる。

(黒坪一樹)

## 18. 太田遺跡第15次

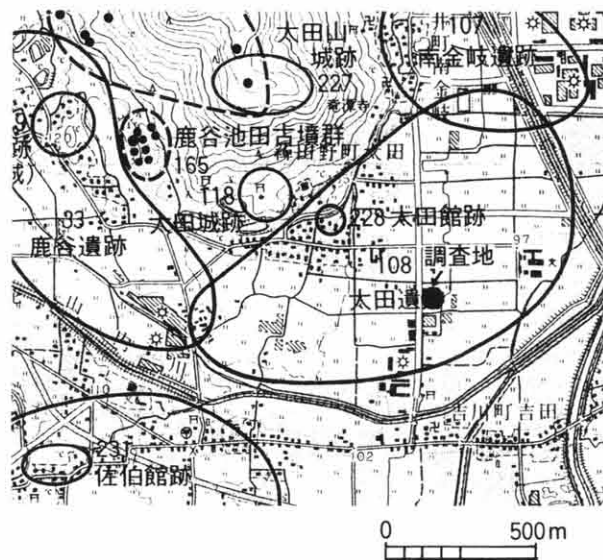
所在地 亀岡市篠田野町太田  
 調査期間 平成14年9月20日～11月8日  
 調査面積 約500m<sup>2</sup>

はじめに 太田遺跡の発掘調査は、京都府農林水産部が施工する府営ほ場整備事業に伴う事前調査である。平成11年度に京都府教育委員会が実施した試掘調査成果をもとに、第1トレンチにおいて面的な調査を実施するとともに、他に2か所の調査区を設定し発掘調査を実施した。

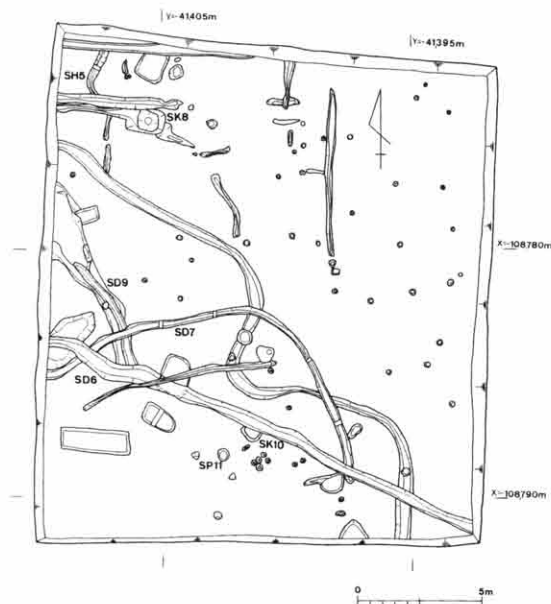
太田遺跡は、縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡であるが、平成13年度に実施した第14次調査では、弥生時代末期の溝や池沼などを検出しており、関連する遺構、遺物の検出が予想された(第1図)。

**調査概要** 第1トレンチは、基本的に北西方向からわずかに南東方向に傾斜しており、北西端での遺構検出面の高さは標高100.6m、最も深い南東端では同100.5mである。検出遺構では第2図に示したように弥生時代末期の溝や土坑、古墳時代後期の溝、鎌倉時代の柱穴群、室町時代の耕作に伴う溝などがある。竪穴式住居跡SH5は、地下式貯蔵穴と思われる土坑SK8の出土土器から弥生時代末期に比定できる。当該住居跡は、先に述べた平成13年度の調査区において確認した集落に類する遺構群と同時期であることから、当該地点付近が、弥生時代末期の集落の南限として想定できる。一方、溝SD7は、溝幅が0.3m、深さが0.3mを測り、ゆるやかな「L」字形を呈している。弥生時代末期の土器が出土しているが、用途などについては不明である。また、溝SD6は、幅0.4mを測り、直線的に南東方向に流れている。溝内には淡茶褐色粗砂層と淡黒色粘土層が互層に堆積しており、偶蹄類目の踏み込み跡がみられる。溝内から陶器編年TK209～217型式に比定できる須恵器の蓋が出土している。なお、建物としては復原し得ないが鎌倉時代に比定できる直径0.2～0.3mのピット群を検出している。これらは、平成13年度の北方隣接調査区において確認した集落関連の遺構と同時期であることから、同一集落の拡がりとして認識できる。

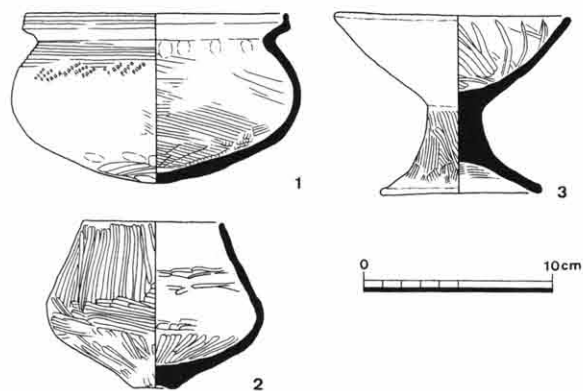
第2トレンチでは、弥生時代の埋葬施設と鎌倉時代のピット群、時期不詳の耕作溝群を検出した。確認した埋葬施設は、総計3基であり、周囲にそれらを囲繞する溝は検出していない。埋葬施設から時期を決める遺物は出



第1図 調査地位置図(亀岡市史付図より抜粋・加筆)



第2図 第1トレンチ遺構配置図



第3図 第2トレンチ竪穴式住居跡4出土土器

土していないが、それらを覆う遺物包含層中から弥生時代末期の土器が出土している。なお、調査区周辺において埋葬関連の遺構は確認されていないことから、小規模な墓域として認識できる。

第3トレンチでは、弥生時代末期の竪穴式住居跡SH04、時期不詳の耕作溝群を検出した。竪穴式住居跡SH04は、一辺5.7mを測る方形の竪穴式住居跡であり、南辺から壺、甕、高杯、器台などの弥生時代末期の土器が良好な状況で出土している。なお、北西辺付近から平坦面を有する花崗岩の台石を検出しており、周辺が住居内に設けられた作業空間として想定できる。

第3図1は、屈曲する口縁部を有し、列点文などの文様を有する近江系の鉢であり、2は、内外面をていねいなヘラミガキにより器面調整した鉢である。この鉢は、北陸を中心とする北近畿からの搬入土器として認識できる。また、3は、ていねいにヘラミガキを施した高杯である。これらの土器群は、他地域との地域間交流を示唆するばかりでなく、太田遺跡が所在する亀岡盆地における弥生時代

末期の土器編年を行ううえで、良好な一括資料となりうる。今後の資料整理と編年的研究に期したい。

まとめ 太田遺跡第15次の発掘調査では、弥生時代末期の集落跡を確認したが、第2トレンチでは埋葬施設を3基確認しており、当該時期の集落域および墓域の位置関係を把握することができた。これら検出遺構の考古学的位置付けを既往の調査成果の中で検討し、太田遺跡が有する歴史的意義をさらに探究する必要がある。

(小池 寛)

## 19. <sup>ながおかきょう</sup>長岡京跡右京第750次・<sup>こうたり</sup>神足遺跡

所在地 長岡京市神足2丁目  
 調査期間 平成14年11月29日～12月13日  
 調査面積 約200m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、御陵山崎線住宅宅地関連総合整備事業に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は長岡京跡右京六条一坊十三町(新条坊では右京六条一坊十五町)にあたり、神足遺跡の範囲内でもある。

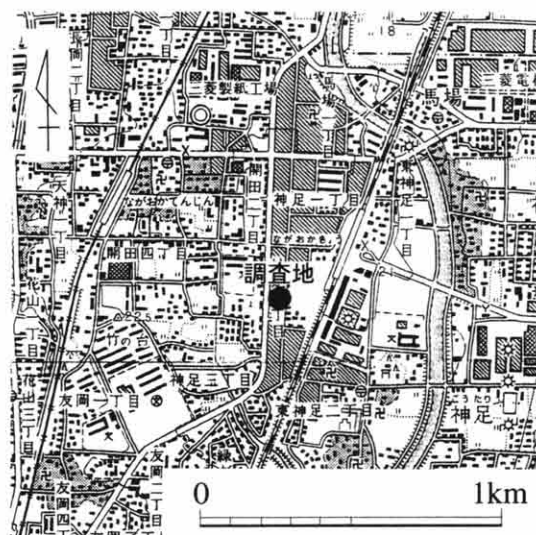
調査概要 本調査区では、中世の堀状遺構と、弥生時代の方形周溝墓を検出した。長岡京期の遺構については、ピットの一部が該当する可能性があるが、確実なものはない。

中世の遺構として特に注目されるのが溝S D02である。この溝S D02は南北に延びる、幅約3m、深さ1.2mの「V」字溝である。その形態や、調査区の北端におよばずに途切れることなどから、堀である可能性が高い。堀の埋土からは拳大の礫と瓦器椀、羽釜などが多量に廃棄された状態で出土した。特に堀の途切れる北半からはふいごの羽口や炉壁、滓といった遺物の出土が目立った。出土遺物などから13世紀前葉に埋没したものと考えられるが、これまでの周辺調査ではこうした遺構は検出されておらず、今後の調査の課題となる。

弥生時代の遺構としては、方形周溝墓を2基検出した。このうち西側に位置する方形周溝墓S X05では、並列する2基の主体部を検出した。主体部は1基が土壙墓、残る1基が木棺墓である。土壙墓S X07は長軸228cm、短軸は北側で70cm、南側で80cmの規模、木棺墓S X08は、墓壙掘形の長軸243cm、短軸は北側で112cm、南側で105cm、木棺痕跡の長軸216cm、短軸は北側で64cm、南側で60cmである。木棺は小口穴をもつ型式で、小口穴の深さは墓壙底から約30cmである。木棺の南半からは基部と先端を欠損した石鏃が1点出土した。なお、2つの墓壙埋土についてはすべて採取し、洗浄を行ったが、調査時に確認することができた1点以外には、石鏃や剥片などは出土しなかった。

弥生時代の墓域については周辺調査でも確認されており、墓域が今回の調査区よりさらに西へ延びる可能性があることがわかった。

(藤井 整)



調査地位置図

(国土地理院1/25,000京都府西南部・淀)

## 20. <sup>しもうえのみなみ</sup>下植野南遺跡( <sup>かどた</sup>門田・ <sup>ごじょうもと</sup>五条本地点)

所在地 乙訓郡大山崎町大字下植野小字門田・五条本

調査期間 平成14年5月7日～7月30日

調査面積 約1,700m<sup>2</sup>

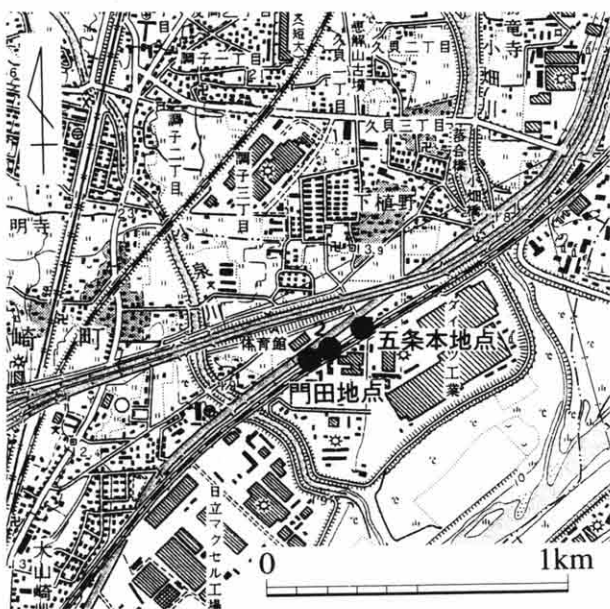
はじめに 今回の調査は、中央自動車道西宮線大山崎ジャンクション建設に伴うもので、日本道路公団関西支社の依頼を受けて実施した。下植野南遺跡は桂川右岸の沖積平野部に営まれた大規模な複合遺跡であり、平成9年度から継続的に調査を実施している。今年度は、現地調査としては最終年度にあたる。今年度の調査地は、下植野南遺跡のうちの土辺・門田・五条本の3地点である。このうち、<sup>ほおづえ</sup>方杖付きの家形埴輪が出土した<sup>つつべ</sup>土辺地点については、すでに報告しているので、今回はその他の2地点について略報する。

### 調査概要

①門田地点 この地点では、新設の水路を挟んで東西2か所のトレンチを設定して調査した。仮に、西側のトレンチを1トレンチ、東側を2トレンチとする。今回、顕著な遺構を検出したのは、1トレンチである。ここでは、掘立柱建物跡3棟、土坑などの遺構を検出した。2トレンチでは、自然流路跡を検出したのみである。

掘立柱建物跡 S B 01 1トレンチ東半部で検出した。2間×3間の南北棟の建物跡である。南北の柱間約2～2.2m、東西の柱間約1.3～1.5mで、全体的には一辺約4.2mのほぼ正方形平面の建物である。

掘立柱建物跡 S B 02 1トレンチ中央付近で検出した。1間×2間以上の南北棟の建物跡とみられる。柱間は南北約1.5～1.8m・東西約3.1mを測る。



第1図 調査地位位置図(国土地理院1/25,000淀)

掘立柱建物跡 S B 03 1トレンチ西側で検出した。2間×2間の総柱建物跡とみられる。全体的には約3.9m四方の建物と考えられる。

②五条本地点 この地点に設定したトレンチでは、河川堆積とみられる礫層が広がっており、ほぼ全体的に自然流路跡であることを確認した。また、この流路跡上の堆積層もしくは整地層とみられる層中から、古墳時代の土師器片が多数出土した。弥生土器片も少量含まれる。この堆積もしくはは



第2図 門田地点全景(空撮、右上が北)

整地層上面では若干のピットなどを検出したが、建物としてまとまるものではない。ピットからは明確な時期を示す遺物が出土していない。

まとめ この調査で顕著な遺構を検出したのは、門田地点の1トレンチである。このトレンチで検出した掘立柱建物跡は、柱穴出土の土器片からみて、古墳時代頃のものと考えられる。これまでの調査では、1トレンチの西側にあたる大山崎町体育館の近辺で古墳時代の掘立柱建物跡群を確認している。今回検出した建物跡はその東側への広がりを示すものとも考えられる。

(引原茂治)



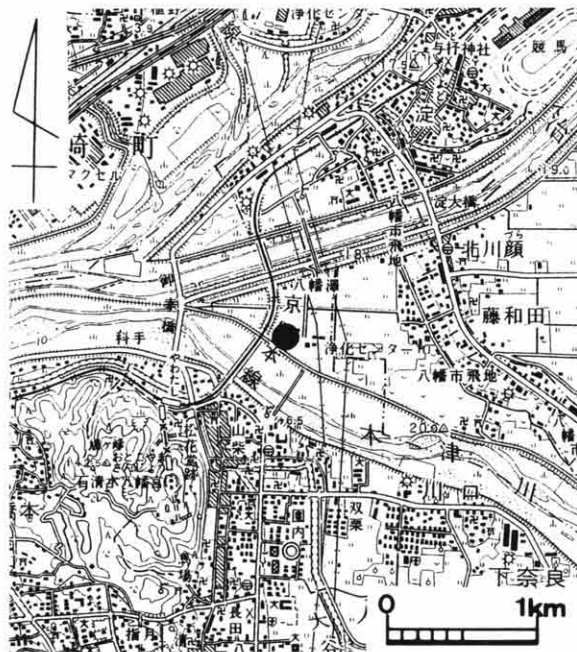
## 21. 木津川河床遺跡第15次

所在地 八幡市八幡一丁目  
 調査期間 平成14年11月5日～11月28日  
 調査面積 約300m<sup>2</sup>

はじめに 木津川河床遺跡は、八幡市北部の木津川河道沿いから男山丘陵裾部にかけて広がる弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。調査地は木津川と淀川に挟まれた洛南浄化センター内に位置する。洛南浄化センター建設に伴う発掘調査は、昭和58年度から行われており、八幡市教育委員会が実施した木津川河川敷の調査も含め、今回の調査で第15次調査となる。浄化センター内の調査では、弥生時代後期・古墳時代後期の竪穴式住居跡や古代の土壌墓、中世の掘立柱建物跡など多くの遺構が検出されている。

調査概要 基本層序は、表土下3.1mまでは浄化センター建設に伴う盛土、3.7mで茶褐色粘質土の島畑盛土を確認した。島畑盛土は、波打った状態の緑灰色砂質土の上に施されている。この層までは地震による液状化した噴砂が認められ、過去の調査成果からも文禄五・慶長元(1596)年に起こった伏見大地震と考えられている。この緑灰色砂質土下層が中世包含層である暗灰色粘土、その下に暗灰色粘質細砂、暗灰色～青灰色細砂が堆積し、この下には木津川の氾濫源に見られる黄白色砂が堆積していた。

遺構は、暗灰色粘土から耕作に伴うと考えられる幅0.8～1.0mと0.2～0.5m前後の溝2種類をトレンチ全面で検出した。深さはいずれも4～12cm前後と浅い。内部から細片化した瓦器、土師器、土釜が少量出土した。これらの遺物は12～14世紀のものである。



調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西南部)

まとめ 古墳時代の集落は検出できなかったが、少量の遺物が出土していることから東側で検出されている古墳時代後期の集落跡が、周辺まで延びてきている可能性がある。中世には過去の調査成果と同様、耕作地として利用されていたことが明らかとなった。島畑が地震の影響を受けていないことから、その下層は15・16世紀、暗灰色粘土は12～14世紀、暗灰色粘質極細砂はそれ以前の土層と考えられる。

(増田孝彦)

## 22. <sup>あかがひら</sup>赤ヶ平遺跡第3次

所在地 相楽郡木津町大字木津小字赤ヶ平  
 調査期間 平成14年6月4日～10月10日  
 調査面積 約800m<sup>2</sup>

はじめに 赤ヶ平遺跡の調査は、関西文化学術研究都市の整備事業に伴い、都市基盤整備公団の依頼を受けて実施したものである。今年度の調査は、昨年度に行った第2次調査の南に隣接し、第2次調査で確認された弥生時代前・中期の竪穴式住居跡や剥片石器廃棄土坑、室町時代の菊花文鏡を埋納した小土坑などを検出しており、第3次調査でも、これらと関連する遺構が検出されるものと期待された。

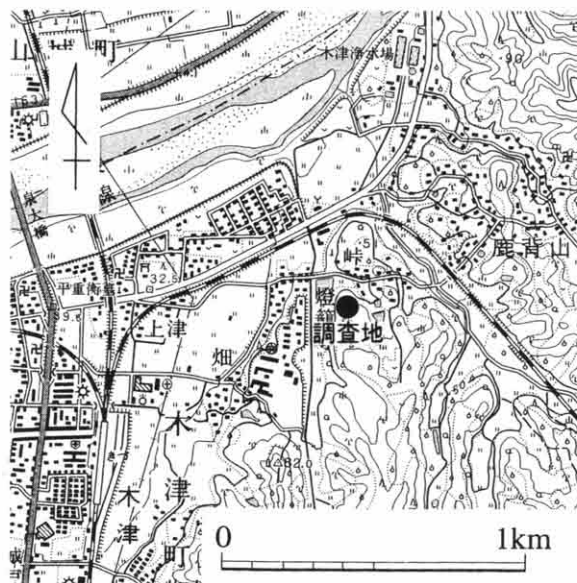
調査は、まず、調査対象地の試掘を行い、面的に調査する範囲を確定したうえで行った。しかし、当初の予想に反して顕著な遺構はほとんど検出されず、若干の遺構と少量の遺物を検出したにとどまる。

**調査概要** 第1トレンチは、第2次調査地の北側に設定した調査区である。調査の結果、中世の遺物包含層、弥生時代の遺物包含層を確認した。また、遺構としては土坑、柱穴などを検出した。しかし、これらのお大半は時期が不明で、土坑S K62から磨滅の著しい弥生土器が出土した。包含層からは、弥生時代前・中期の弥生土器や、中世の瓦器、土師器の細片などが出土した。

第2～5トレンチは、第2次調査地の南側について、まず試掘調査を行い、その結果を受けて調査区の拡張を行った。調査の結果、弥生時代の土坑S K65や時期不明の墓墳S X63、中世と思われる溝S D74・75などを検出した。この調査結果を受けて調査地の東半にあたる第3トレンチと第4トレンチに囲まれた範囲を拡張し、さらに調査を行った。しかし、調査区の南辺で検出した溝S D76や、北西端で検出した土坑S K84を除いて、顕著な遺構は確認できなかった。

以下、検出した遺構について述べる。

墓墳S X63は、全長1.47m、幅0.65mを測る(第2図)、やや小規模なもので、墓墳の内部には組み合わせ式木棺が納められていた。木棺は全長1.47m、幅0.48m(内法の長さは1.07m、幅は0.33m)を測る。木棺の材は腐食して遺存していなかったが、明瞭な土色の変化が認められた。木棺の内部からはサヌカイト製の石器剥片が出土したが、副葬品などはなく、詳しい時期は不明である。ただ、木棺



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000奈良)

の特徴から弥生時代ないし古墳時代のものと考えられる。

溝S D74～76は、全長12～14m、幅0.3～1.1m、深さ0.06～0.15mを測る直線的な溝で、溝S D74・75は概ね南北方向に、溝S D76は東西方向にのびる。両者には切り合い関係があり、溝S D74・75が後出する。また、溝S D74・75は、併行してのびることから道状遺構の側溝に相当する可能性がある。溝内からは瓦器、土師器などの土器片が少量出土した。詳しい時期は不明であるが、瓦器の小片などがみられることから、中世に掘削されたものと考えられる。溝の遺存状況は必ずしも良好とは言えず、調査地周辺が相当削平されていると考えられる。

土坑S K84からは、中世の遺物がややまとまって出土した。

第6トレンチは、第2次調査における遺跡南辺の試掘調査の延長部にあたる。調査の結果、近・現代の耕作に伴う溝やのほか、時期不明の土坑などを検出した。出土遺物は近・現代のものがほとんどである。

まとめ 第2次調査では、弥生時代の遺構・遺物を多数検出しており、今回の第3次調査でも関連する遺構が検出されると予想されたが、調査の結果、顕著な遺構はほとんど検出されなかった。これは溝S D74～76などの状況から、開墾などによって、本来の遺構面が相当削平されたものと考えられた。ただ、今回、試掘を行ったものの面的な調査に至らなかった西半分では、土坑S K65や包含層から弥生土器の破片が少量ではあるが出土したことから、弥生時代の遺構が遺存する可能性がある。

また、遺跡の南辺を調査した第6トレンチでは、時期不明の土坑があり、昨年度の調査で検出された遺構と関連する可能性がある。

(筒井崇史)



第2図 墓塚S X63検出状況

94. おおすみくるまづか 大住車塚古墳・おおすみみなみづか 大住南塚古墳

京都府南部の京田辺市北西部にある大住の家並みをほんの少し離れた田園の中に、大きな古墳が二つ並んでいる。この「大住」と呼ばれる地域に、南山城地域では前方後方墳という珍しい墳形をもつ古墳がある。

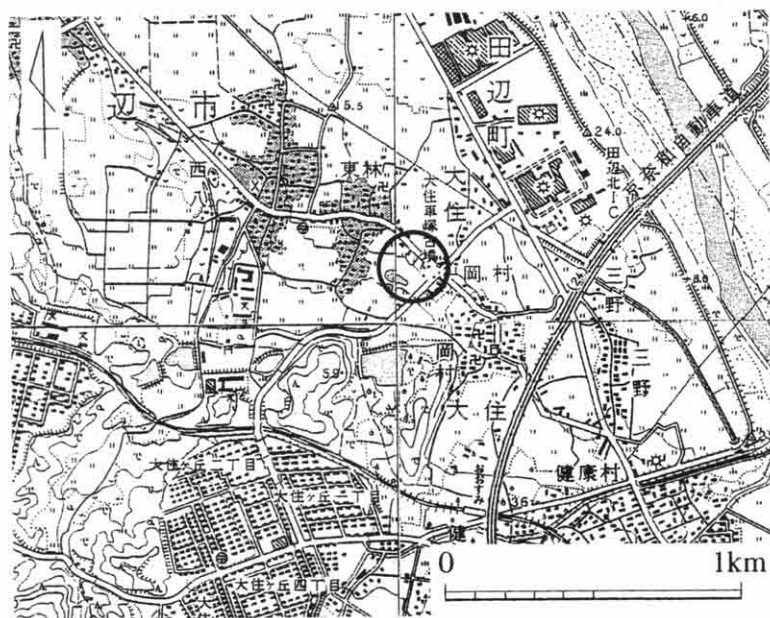
(1)大住車塚古墳

東側に位置している大住車塚古墳は、京都府京田辺市大住八王子に所在している前方後方墳で、別名「チコンジ山古墳」と呼ばれる。前方部を北西に向けた全長約66mの古墳である。周囲の水田畦畔などから平面形が長方形の周濠をもつことが確認されている。主体部については未発掘のため詳細は不明であるが、地元の伝承によると竪穴式石室であると言われている。葺石の存在は確認されているが、埴輪の存在は確認されていない。

昭和49年に、国の史跡に指定されている。現在は、史跡整備が行われ保存されている。

(2)大住南塚古墳

大住車塚古墳の西側には、同じく前方後方墳の大住南塚古墳がある。大正11年の調査報告<sup>(注1)</sup>によると、「今や開墾せられて茶及び果樹の畑となり著しく形を損し、特に前方部の如きは其の半ばを失へるの状況」と報告されており、現在の状況とほとんど変わらない。昭和47年の龍谷大学による測量調査<sup>(注2)</sup>においては、全長約65mの前方後円墳で盾形の周濠をもつ古墳と報告されていた。



第1図 位置図(国土地理院1/25,000田辺・宇治・枚方・淀)

しかし、昭和60・61年度の京田辺市教育委員会の調査<sup>(注3)</sup>によって、長方形の周濠をもつ全長71mの前方後方墳であることが確認された。その際、埴輪(円筒・朝顔・家形)や葺石の存在も確認された。主体部は竪穴式石室であったが、明治時代の開墾時に破壊されたといわれている。その時、石製品7点・刀剣10数点が出土したと伝えられている。

大住車塚古墳・大住南塚古墳の築造年代は、埴形や埴輪などの出土遺物から古墳時代前期に造られた古墳であると推定されている。

この「大住」という地名には、奈良時代に九州南部の隼人の一族が大隅半島からこの地に移住して朝廷に仕え、宮中儀式の警護や歌舞を務めたという由来があり興味深い。大住車塚古墳・大住南塚古墳の周辺には、松井横穴群や顔に刺青をした人物埴輪が出土した堀切古墳群・横穴群、隣接する八幡市には荒坂横穴群、女谷横穴群などが群集する九州とのつながりを想像できる遺跡が存在している。

大住という地域は、京都府内においても前方後方墳や横穴群という特殊な墓制をもつ地域であり、現地に赴き広がる田園のなかにたたずむ大住車塚古墳と大住南塚古墳を眺めて、隼人の伝承や当時の時代背景を想像してみるのもいいのではないだろうか。

(村田和弘)

#### 交通機関

近鉄新田辺駅下車、京阪バス八幡市駅行き(74系統)岡村停留所下車西に徒歩約0.2km、(75系統)中島橋停留所下車西に徒歩約0.5km、または、JR学研都市線大住駅下車北に徒歩約1.2km

#### 参考文献

- 注1 梅原末治「大住村車塚古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告 第3冊』京都府教育委員会) 1922  
注2 万波俊介「大住車塚古墳」(『南山城の前方後円墳』龍谷大学考古学資料室) 1972  
奥村清一郎「大住南塚古墳」(『南山城の前方後円墳』龍谷大学考古学資料室) 1972  
注3 鷹野一太郎『大住車塚古墳発掘調査概報』田辺町教育委員会 1986  
鷹野一太郎『大住車塚古墳発掘調査概報Ⅱ』田辺町教育委員会 1987



第2図 大住車塚古墳・大住南塚古墳遠景(南西から撮影)

## 長岡京跡調査だより・84

長岡京連絡協議会の平成14年11月27日と12月18日の月例会では、宮内2件、左京域5件、右京域13件の調査が報告された。京域外の3件を併せると合計23件となる。

調査地一覧表(2002年12月末現在)

番号	調査回数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第418次	7ANDMD-6	向日市森本町前田27	(財)向日市埋文	10/28～11/7
2	宮内第419次	7ANFJK-9	向日市上植野町浄徳11～26	(財)向日市埋文	10/28～11/7
3	左京第473次	7ANEUK-4	向日市鶏冠井町馬司1番地	(財)向日市埋文	6/17～12/20
4	左京第477次	7ANEJS-13	向日市鶏冠井町十相1-1・2-1	(財)向日市埋文	11/11～11/29
5	左京第478次	7ANEJS-14	向日市鶏冠井町十相1-1・2-1	(財)向日市埋文	11/11～11/29
6	左京第479次	7ANMST-7	長岡京市神足芝本地内	(財)長岡京市埋文	12/2～3/28
7	左京第480次	7ANDSD-3	向日市森本町下町田2-1・2-2	(財)向日市埋文	11/18～1/31
8	向日市立会MT02106次	7ANCKM	向日市向日町北山65番地	(財)向日市埋文	11/27～11/29
9	右京第746次	7ANUDC-2	京都市西京区大原野石見町地内	(財)京都市埋文研	8/26～
10	右京第748次	7ANMWY-8	長岡京市東神足一丁目地内	(財)長岡京市埋文	11/25～12/27
11	右京第749次	7ANGNC-4	長岡京市井ノ内西ノ口18-1	(財)長岡京市埋文	10/7～11/12
12	右京第750次	7ANMHK-6	長岡京市神足二丁目	(財)京都府埋文	11/6～12/13
13	右京第751次	7ANKSM-10	長岡京市開田二丁目地内	(財)長岡京市埋文	10/22～11/25
14	右京第752次	7ANKDD-4	長岡京市開田四丁目5	(財)長岡京市埋文	11/5～12/19
15	右京第753次	7ANGHD-5	長岡京市井ノ内広海道34-7	(財)京都府埋文	12/11～2/末
16	右京第754次	7ANNMC-5	長岡京市友岡四丁目208・209	(財)長岡京市埋文	11/11～11/25
17	右京第755次	7ANBNI-6	向日市寺戸町西垣内15-1	(財)向日市埋文	11/26～1/末
18	右京第756次	7ANMDB-8	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	11/18～12/20
19	右京第757次	7ANMSL-8・ MWY-9	長岡京市東神足一丁目12-2他	(財)長岡京市埋文	11/25～2/22
20	右京第758次	7ANSSR-5	大山崎町字円明寺小字里後5-1他	大山崎町教委	11/20～11/29
21	物集女城跡第9次・ 中海道遺跡第61次	9ZMANY-9・ 3NNANK-61	向日市物集女町中条23-1・ 23-4	(財)向日市埋文	9/18～11/26

22	境野古墳測量調査		大山崎町字下植野小字境野	大山崎町教委	10/28～11/7
23	山城国府跡第66次	7YYS'UD	大山崎町字大山崎小字上の田 69	大山崎町教委	10/29～11/8

### 長岡京跡発掘調査抄報

**左京域** すでに東二坊大路と二条条間大路の交差点が確認されていた長岡京跡左京第473次の下層の調査で、縄文時代晩期から弥生時代中期の初めまで流れていた2本の川跡が検出された。周辺の調査成果を合わせると、2本の川はやや下流で合流し、辺りは当時カシやサクラなどの木々が生えていたようである。埋土の中層と下層からは、縄文時代の晩期から弥生時代中期前葉の土器が出土している。上層から少量であるが古墳時代前期(布留式)が出ているので、この川が最終的に埋まったのはその時期と思われる。量的にもっとも多いのは弥生時代中期初頭の土器である。川岸には直径約1.5m、深さ1mの水を溜める遺構があり、木器貯蔵など、この川が弥生時代に生活用水として利用されていたこともわかった。土器以外の出土遺物には、縄文時代の磨石や石棒、弥生時代の石庖丁や石斧など当時の生活をうかがわせる資料がある。また、別の素掘りの溝には打製の石製短剣が横たわっていた。長さ16.7cm、幅3.0cm、重さ82.36gで、完形品としては乙訓地域で初めての出土例となった。

その他、左京域の条坊関係の遺構として、左京第477次において東二坊坊間小路の東側溝と西側溝が検出された。

**右京域** 長岡京跡右京第746次調査では、長岡京期の遺構として二条条間南小路の南側溝と北側溝が確認された。中世集落の一画に当たるらしく、掘立柱建物跡4棟、柵列3条が検出された。建物跡群には2時期あり、総柱建物跡の建物1・2と柵列1の古い一群と、それぞれの跡地に重なるように建てられた建物3・4と柵列2の新しい遺構群がある。また、同じ12～13世紀の遺構として、土壌がいくつかある。20cm程度の礫が敷かれていたり、投げ込まれていたりし、また火を受けた痕跡もあり、今のところ茶毘場と見られているが、建物の内部施設としてみれば、「へっつい」など火所の下部構造の可能性も出てくる。今後の調査と検討が期待される。

その他、右京の条坊関係の遺構として、右京第752次で西二坊坊間小路の西側溝が確認されている。

**京域外** 長岡京域の北、物集女城跡第9次調査・中海道遺跡第61次調査で中世の物集女城跡に関する知見が得られているが、平安時代の中海道遺跡の土坑も注目される。直径2mほどの土坑で、土師器の椀や皿、須恵器の甕と鉢、黒色土器、緑釉や灰釉などの高級陶器、白磁や青磁など中国製の磁器など、多種多様な遺物が出土し、主要なものだけでも2,000点を越えている。時期は10世紀の後半のもので、平安時代中期の土器の器種の取り合せ・使い方・捨て方、等々についての重要な資料となった。

(小山雅人)

## センターの動向(02.11~12)

### 1. できごと

11. 1 高橋誠一理事、芝山遺跡(城陽市)  
現地視察  
国営農地開発事業丹後地区完工式  
(於：峰山町)中谷雅治常務理事・事務局長出席
- 5 池上遺跡第15次(八木町)発掘調査開始  
木津川河床遺跡第15次(八幡市)発掘調査開始
- 6 太田遺跡第15次(亀岡市)関係者説明会
- 8 太田遺跡第15次、発掘調査終了(9.20~)  
里遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 9~10 日本考古学協会大会(於：橿原市)  
竹井治雄専門調査員、石崎善久調査員出席
- 12 都出比呂志理事、池上遺跡第13次(八木町)現地視察
- 14 市町村文化財保護行政担当者研修会(於：京都市)小山雅人調査第2課総括調査員、森島康雄主任調査員出席
- 15 職員研修(於：当センター)講師：高橋誠一理事「条里調査と地籍図の利用」  
教育庁職員行政・人権問題研修(於：京都市)今村正寿総務課主任、鍋田幸世主事、石井清司調査第1係長、伊野近富調査第2係長、松井忠春・増田孝彦・竹原一彦・田代弘主任調査員、柴暁彦・高野陽子・石崎善久調査員出席
- 18 中谷雅治常務理事・事務局長、神足遺跡(長岡京市)現地視察
- 19 教育庁職員行政・人権問題研修(於：京都市)杉江昌乃総務課総務係長、鈴木直人主事、奥村清一郎調査第2課課長補佐、辻本和美資料係長、引原茂治・戸原和人・田中彰・岩松保・小池寛・森島康雄主任調査員、岡崎研一・石尾政信・竹井治雄・黒坪一樹専門調査員、中村周平・野島永・中川和哉・筒井崇史・藤井整・村田和弘調査員出席
- 21 木橋北城跡(弥栄町)発掘調査終了(9.12~)
- 22 教育庁役付職員人権問題研修(於：京都市)安田正人総務課長、久保哲正調査第1課長、小山雅人調査第2課総括調査員出席
- 25 薪遺跡(京田辺市)発掘調査開始
- 26 芝山遺跡(城陽市)現地説明会
- 27 池上遺跡第13次(八木町)現地説明会  
長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 28 池上遺跡第13次、発掘調査終了(~7.12)  
木津川河床遺跡第15次、発掘調査終了(11.5~)
12. 4 第66回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、川上



- 貢副理事長、中谷雅治常務理事・事務局長、藤井学、井上満郎、都出比呂志、高橋誠一、増田富士雄、三品廣実、杉原和雄各理事出席
- 5 魚田遺跡第6次・西村遺跡・門田遺跡(京田辺市)発掘調査開始  
観音寺遺跡(福知山市)現地説明会
- 6 観音寺遺跡、発掘調査終了(5.21～)  
長岡京跡右京第750次・神足遺跡、現地説明会
- 11 長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡(長岡京市)発掘調査開始
- 13 長岡京跡右京第750次・神足遺跡、発掘調査終了(10.29～)
- 17～20 埋蔵文化財発掘技術者専門研修「遺跡地図情報課程」(於：独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)筒井崇史調査員参加
- 18 長岡京連絡協議会(於：当センター)内里八丁遺跡第19次(八幡市)発掘調査開始
- 20 竹野遺跡・宮遺跡(丹後町)発掘調査終了(10.22～)  
大垣・一の宮遺跡(宮津市)発掘調査終了(9.18～)

## 受贈図書一覧(02.11~12)

### (財)いわき市教育文化事業団

広野町文化財調査報告第3冊 堂ノ原遺跡、同第4冊 堂ノ原遺跡、夏井廃寺、いわき市埋蔵文化財調査報告第69冊 中山館跡Ⅰ区、同第81冊 小茶円遺跡、同第82冊 横山古墳群、同第83冊 平成13年度市内遺跡試掘調査報告、同第86冊 日陰遺跡、同第87冊 栗木作遺跡、同第89冊 上ノ台遺跡

### (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第166集 二之宮洗橋遺跡、同第296集 波志江中野面遺跡(2)、同第304集 荒砥諏訪西遺跡Ⅰ、同第305集 田部井大根谷戸遺跡、研究紀要20

### 埼玉県立埋蔵文化財センター

年報12

### (財)香取郡市文化財センター

香取郡市文化財センター調査報告第35集 織幡ササノ倉遺跡Ⅱ、同第38集 神崎カントリークラブ埋蔵文化財調査報告書Ⅰ、同第56集 竜谷城址Ⅱ、同第66集 主要地方道成田小見川鹿島港線、同第80集 多古台遺跡群Ⅱ、同第81集 高部宮ノ前Ⅱ遺跡・青山甚太山遺跡Ⅱ地区、同第82集 吉原遺跡、事業報告ⅩⅠ

### (財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

年報22

### (財)横浜市ふるさと歴史財団

南原遺跡発掘調査報告

### 明野村埋蔵文化財センター

明野村文化財調査報告12 深山田遺跡、同13 大日川原遺跡、同14 梅之木遺跡Ⅰ

### (財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書59 吹野原A遺跡

### (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 奈良崎遺跡

### (財)岐阜県文化財保護センター

岐阜県文化財保護センター調査報告書第76集 徳山陣屋跡、同第77集 後平茶臼古墳・後平遺跡

### (財)瀬戸市埋蔵文化財センター

平成13年度 年報、江戸時代の瀬戸窯

### 三重県埋蔵文化財センター

三重県埋蔵文化財調査報告228 天花寺城跡・小谷赤坂遺跡、同230 川島遺跡群(第1次)発掘調査報告、同233 惣作遺跡発掘調査報告

### (財)松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書第91集 大坪遺跡発掘調査報告書

### 鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(22) 干迫遺跡、同(32) 池之頭遺跡、同(33) 今里遺跡、同(34) 小倉畑遺跡、同(35) 高井田遺跡、同(36) 九日田遺跡・供養之元遺跡・前原和田遺跡、同(37) 茶屋ノ元遺跡・鏡・安原遺跡・宮野脇遺跡・小松遺跡・前市野原遺跡・東下原遺跡、同(38) 計志加里遺跡、同(39) 鍛冶屋馬場遺跡、同(40) 寿国寺跡・梅落遺跡、同(41) 上野原遺跡、同(42) 松尾城跡、同(44) 諏訪免遺跡、同(45) 本御内遺跡

### 青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第328集 青森県遺跡詳細分布調査報告書ⅩⅣ、同第329集 十三湊遺跡Ⅶ、同第330集 十三湊遺跡、同第331集 清水遺跡、同第332集 弥生平遺跡、同第333集 餅ノ沢遺跡Ⅱ、同第334集 幸神遺跡、同第335集 古坊遺跡、同第336集 田向冷水遺跡

### 岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第113集 柳之御所遺跡

### 石岡市教育委員会

国分遺跡確認調査報告書

### 箕郷町教育委員会

史跡箕輪城跡調査報告第3集 史跡箕輪城跡Ⅲ

### 志木市教育委員会

志木市の文化財第34集 埋蔵文化財調査報告書3

### 文京区教育委員会

文京区埋蔵文化財調査報告書第22集 弓町遺跡

### 海老名市教育委員会

相模国分寺関連遺跡3、No.88(有鹿)遺跡発掘調査報告書、秋葉山古墳群第1・2・3号墳発掘調査報告書、大谷下浜田遺跡第12・13次調査発掘調査報告書

### 八田村教育委員会

八田村文化財調査報告書第4集 徳永・御崎遺

- 跡  
伊那市教育委員会  
伊那の中世伝説・山岳信仰  
新発田市教育委員会  
新発田市埋蔵文化財発掘調査報告第24 新発田  
城跡発掘調査報告書Ⅲ  
大島町教育委員会  
北高木遺跡発掘調査報告書  
福岡町教育委員会  
福岡町埋蔵文化財調査報告書9 富山県福岡町  
箕島地区に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報  
告、同10 江尻遺跡発掘調査報告、同11 木舟  
城跡発掘調査報告  
舟橋村教育委員会  
舟橋村埋蔵文化財調査報告書8 古海老江遺跡  
発掘調査報告  
朝日町教育委員会  
朝日町文化財調査報告書Ⅱ  
多治見市教育委員会  
多治見市文化財保護センター研究紀要 第7号  
富加町教育委員会  
富加町文化財報告書第16号 半布里遺跡、古代  
のむらと家族  
静岡市教育委員会  
静岡市埋蔵文化財調査報告53 惣ヶ谷古墳群、  
同56 有東遺跡、同58 長沼遺跡、同60 特別  
史跡登呂遺跡発掘調査概要報告書Ⅲ、同61 駿  
府城跡Ⅱ、ふちゅ～るNo.10  
大阪府教育委員会文化財調査事務所  
年報5、大阪府埋蔵文化財調査報告200-1 新  
堂廃寺、同2001-1 招提中町遺跡、同2001-2  
余部遺跡、同2001-3 梶遺跡、同2001-4 磯之  
上十ノ坪遺跡、同2001-5 岸和田城跡、同  
2001-6 跡部遺跡、同2001-7 禅城寺・宇保・  
神田北遺跡、讃良郡条里遺跡(蔀屋北遺跡)発掘  
調査概要・Ⅳ、紅茸山南遺跡発掘調査概要、天  
王地区遺跡確認調査概要、加納古墳群・平石古  
墳群発掘調査概要、田能遺跡群発掘調査概要・  
Ⅲ、男里遺跡発掘調査概要・Ⅵ  
羽曳野市教育委員会  
文化財保護のてびき、羽曳野市埋蔵文化財調査  
報告書45 羽曳野市内遺跡調査報告書平成6年  
度、同46 羽曳野市内遺跡調査報告書平成11年  
度、同47 古市遺跡群X XⅢ  
富田林市教育委員会  
富田林市埋蔵文化財調査報告33 平成11年度富  
田林市内遺跡群発掘調査報告書  
熊取町教育委員会  
熊取町埋蔵文化財調査報告第37集 熊取町内遺  
跡群発掘調査概要報告書XⅥ、同第38集 久保  
A遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ、同第39集 小垣  
内西遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ  
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
平成13年度 年報、兵庫県文化財調査報告第  
117冊 喜多中世墓群、同第204冊 上石遺跡、  
同第225冊 的場遺跡・上ノ段遺跡、同第227冊  
五反田遺跡、同第229冊 入佐川遺跡、同第234  
冊 年ノ神古墳群、同第236冊 貝谷遺跡、同  
第237冊 大年山遺跡・大年山古墳、同第240冊  
梅田古墳群Ⅰ、同第242冊 薬師前遺跡発掘調  
査報告書  
津名郡町会  
津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅳ  
曾爾村教育委員会  
奈良県曾爾村文化財調査報告書第1集 太良路  
南ダイ遺跡発掘調査報告  
安来市教育委員会  
安来市埋蔵文化財調査報告書第38集 小馬木Ⅱ  
遺跡  
岡山県教育庁文化課  
岡山県埋蔵文化財報告32  
東広島市教育委員会  
旧石器時代のムラを探る  
今治市教育委員会  
今治市埋蔵文化財調査報告書第64集 高橋岡ノ  
下遺跡・高橋具禅寺遺跡・高橋岡ノ端遺跡、同  
第65集 高橋湯ノ窪遺跡、同第66集 松木広田  
遺跡(松木遺跡群)Ⅰ、同第67集 市内遺跡試掘  
確認調査報告書XⅣ  
岡垣町教育委員会  
岡垣町文化財調査報告書第22集 墓ノ尾遺跡  
群、同第23集 東田古墳群Ⅱ  
玉里村立史料館  
館報 第7号  
栃木県立博物館  
プロヴァンス発見  
かみつけの里博物館  
犬の考古学  
富士見市立水子貝塚資料館  
富士見の発掘30年  
千葉県立房総風土記の丘  
有樋尖頭器の発生・変遷・終焉  
(財)新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館  
市谷砂土原三丁目遺跡  
世田谷区立郷土資料館  
世田谷最古の狩人たち  
五島美術館

- 茶の湯 名碗  
出光美術館  
館報 第120号  
青梅市郷土博物館  
下内遺跡(第2次)に伴う事前発掘調査、横尾原遺跡発掘調査報告書  
高岡市立博物館  
年報 第16号  
清水町立郷土資料館  
清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 小羽山古墳群、同VI 甌谷  
斎宮歴史博物館  
王朝人の四季  
鈴鹿市考古博物館  
伊勢国分寺跡1、同2、同4、天王遺跡第3次調査報告、天王遺跡第5次発掘調査報告、年報第3号、鍋の一万年、耳飾り、三重のおかしな須恵器  
東大阪市立郷土博物館  
うまかいのさと展示解説書  
橿原市千塚資料館  
新沢千塚126号墳復原模造品作製図録  
青谷上寺地遺跡展示館  
「弥生の博物館」青谷上寺地遺跡  
松山市考古館  
古照遺跡とその時代、海を渡ってきたひと・もの・わざ  
  
早稲田大学會津八一記念博物館  
埴輪を造る  
日本女子大学史学研究会  
史艸 第43号  
神戸女子大学史学会  
神女大史学 第19号  
奈良大学文学部文化財学科  
文化財学報 第20集  
天理大学附属天理参考館  
天理参考館報 第15号  
島根大学法文学部考古学研究室  
島根大学考古学研究室調査報告第4冊 石ヶ坪遺跡発掘調査概報I  
忠南大學校百濟研究所  
百濟研究 第36輯  
  
山梨文化財研究所  
帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第10集、西表堤防遺跡発掘調査報告書、柳坪北遺跡、深山田・下反保・屋敷添遺跡、平石遺跡、大坪遺跡  
菅生第三遺跡礼拝施設地区調査団  
菅生第三  
国立国会図書館  
日本全国書誌 通号2399号  
(株)ジャパン通信情報センター  
文化財発掘出土情報 第247号  
(株)講談社  
日本の歴史第01巻 縄文の生活誌 改訂版  
小学館  
考古資料大観 第2巻、同第5巻、同第9巻  
第一法規出版(株)  
月刊 文化財11月号  
(財)韓国文化研究振興財団  
青丘学術論集 第21集  
テイケイトレード株式会社  
白銀町遺跡  
玉川文化財研究所  
田名塩田遺跡群I、同II、同III、岡上-4遺跡第2地点発掘調査報告書、久ヶ原遺跡発掘調査報告書、小田原城三の丸御長屋跡第II地点発掘調査報告書、南原遺跡発掘調査報告書、久野下馬道上遺跡発掘調査報告書、雪ヶ谷貝塚  
氷見市史編さん室  
氷見市史7 資料編五 考古  
(財)古代学協會  
古代文化 第54巻第10~12号  
独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所  
日中古代都城図録  
朝鮮学会  
朝鮮学報 第184輯  
木簡学会  
木簡研究 第24号  
  
(財)長岡京市埋蔵文化財センター  
長岡京市埋蔵文化財調査報告書第28集 長岡京跡右京第746次・開田遺跡発掘調査報告  
京都府立山城郷土資料館  
南山城の歴史と文化  
(財)高麗美術館  
研究紀要 第3号  
(財)泉屋博古館  
泉屋博古館 名品選  
綾部市資料館  
由良川歴史散歩2002  
城陽市歴史民俗資料館  
まつりのかたち  
学校法人橘女子学園  
橘女子学園百年史  
京都大学埋蔵文化財研究センター  
京都大学構内遺跡調査研究年報1997・1998年度

同志社大学歴史資料館

同志社大学歴史資料館(要覧)、同志社大学歴史資料館調査研究報告第3集 鷲峰山・金胎寺とその周辺地域の調査、館報第5号

伊野近富

京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 周山古墳群・高梨経塚・高梨遺跡発掘調査概報

岡田 登

『紀勢町史』記録編抜刷 原始・古代・中世をたどる、『多度町史 資料編1』考古・古代・中世抜刷 考古編

野島 永

石川県埋蔵文化財情報 第8号

山本祐作

東播磨 第9号

【お詫と訂正】前号第86号に以下の誤植がありましたので訂正いたします。

『京都府埋蔵文化財情報』第86号正誤表

頁	場所	誤	正
表紙	平成14年度発掘調査略報	...略報----- 12	...略報----- 13
同上	同上	11. 内里八丁遺跡第5次	11. 内里八丁遺跡第18次
17	表題	11. 内里八丁遺跡第5次	11. 内里八丁遺跡第18次
22	下から2行目	2. 技術.....型式分類分類	2. 技術.....型式分類

### 編集後記

春の訪れとともに、慌ただしく年度末が過ぎようとしています。今年度の最終号になります情報87号が完成しましたのでお届けします。

本号では、恒例の各遺跡の調査成果の速報とともに、府内でも大規模な横穴群の調査となった八幡市女谷・荒坂横穴群を取り上げました。今回の発掘調査で出土した人骨について、詳細なデータに基づき、改葬の具体例を検証した力作です。現在、次年度の報告書刊行をめざし、鋭意、整理作業中です。ご期待下さい。

(編集担当=辻本和美)

## 京都府埋蔵文化財情報 第87号

平成15年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961 (代)

『京都府埋蔵文化財情報』 第87号正誤表

頁	場所	誤	正									
2	付表	付表の担当者名、「中村修平」は「中村周平」の誤りです。										
9	下から6行目	調査においては27体の人骨が出土した。	調査においては28体の古墳時代の人骨が出土した。									
9	下から5行目	6体については遺存状態の悪さから詳細は不明である。	7体については遺存状態の悪さから詳細は不明である。									
11	9行目	全27体中2体しかないが、	全28体中2体しかないが、									
12	付表											
(誤)	人骨6	女谷B	12号	頭蓋骨に近接して骨種不明の骨片	右眼窩上縁、前頭骨、右側頭骨、頭頂骨		長管骨(?)		不明	不明	不明	不明
(正)	人骨6	女谷B	11号	骨片が2か所に分かれて出土。歯のエナメル質が遺存	歯のエナメル質が遺存				不明	不明	不明	不明
15	付表											
追加	人骨28	荒坂B	19号	鉄刀の下から椎骨と長管骨が出土		椎骨1	長管骨の骨体1		不明	不明	不明	不明
19	8行目	大腿骨の上に置かるのであるが、	大腿骨の上に置かれるのであるが、									



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER